



KASEI

Kyushu
Architecture Student
Supporters for
Environmental
Improvement Project

KASEIプロジェクト年次報告2017

Annual Report 2017

KASEIプロジェクト実行委員会



02	KASEI実行委員長挨拶	14	活動事例01: 甲佐町白旗 甲佐町乙女	42	論考01: 3年目のKASEI
03	KASEI学生代表挨拶	17	活動事例02: 益城町安永・飯野小	44	論考02: 学生主体のKASEI活動に 期待すること
04	熊本地震現状	18	活動事例03: 西原村小森	46	論考03: 複数の研究室による 情報共有・情報発信の 仕組みづくり
06	仮設団地に関する研究発表	20	活動事例04: 宇土市境目 益城町木山	48	論考04: KAPとKASEIの被災者支援
08	熊本県応急仮設住宅居住者を 対象とした全世帯アンケート調査	22	活動事例05: 益城町テクノ	50	年間スケジュール
10	KASEI活動拠点マップ(熊本地震)	25	活動事例06: 宇土市新松原 南阿蘇村室第2	51	メディアスクラップ
12	KASEI活動一覧	28	活動事例07: 御船町東小坂	52	寄付賛同願い
		30	活動事例08: 宇土市境目・高柳 宇城市御領・曲野長谷川・当尾	53	活動助成・賛助会員
		32	活動事例09: 熊本市城南町さんさん2丁目 阿蘇市内牧	54	メンバー 一覧
		34	活動事例10: 益城町小池島田 嘉島町	56	編集後記
		36	活動事例11: 美里町くすのき平 御船町玉虫・甘木		
		38	九州北部豪雨現状		
		39	KASEI活動拠点マップ(九州北部豪雨)		
		40	活動事例12: 朝倉市林田		

実行委員長挨拶

Introduction of Executive chairman

末廣 香織 Kaoru SUEHIRO
九州大学大学院 人間環境学研究院 都市・建築学部門 准教授

KASEI活動の変化

2016年7月に始まったKASEI(九州建築学生仮設住宅環境改善)プロジェクトも3年目に入ろうとしている。手探り状態だった初年度の活動を経て、熊本地震被災者のための仮設住宅団地での生活が落ち着いてきたことと平行して、活動内容も徐々に変化してきた。当初の目的だった仮設住宅の居住環境も一通りの整備は終わり、「ものづくり」として取り組めることは、ほとんど無くなりつつある。

こうした状況の変化を受けて、2017年度の活動からは今後の仮設住宅の計画や運営に役立てるための調査を行うこととした。これまでに居住者の生活状況を調べるアンケート、みんなの家の使われ方や管理運営方法のヒアリングなどを行ってきた。今後も、仮設住宅団地の屋外空間の使われ方、全みんなの家の写真、居住者へのヒアリングなどの調査を行う予定である。

さて現在では、被災した建物の除却もほぼ終わり、新しい住まいを自力で再建し、仮設住宅を退去してゆく方々も増えてきた。各自治体が取り組む災害公営住宅の建設も進んでいる。仮設住宅の設置期間は基本的に2年間であり、熊本の場合は3年まで延長されることが決まったため、これから仮設住宅を後にする世帯も一気に増えてゆくだろう。仮設住宅の仕舞い方や、災害公営住宅での支援活動についても考えてゆく必要がある。

支援へのお礼

KASEI活動は、日本財団を始めとする多くの支援者から寄付や賛助会費をいただいている。また他にも多くの方々に協力いただきながら活動を進めてきた。アートポリス班を始めとする熊本県の方々、各自治体関係者、建設関連業者の方々、他のボランティア団体の方々など、本当に多くの方々にご協力いただいた。しかしとりわけお世話になっているのは、実は仮設住宅に暮らす被災者の方々ではないかとい

う気がしている。学生たちと被災地で活動していると、果たして自分たちが支援しているのか、あるいは実は支援されているのかが分からなくなるケースも多い。学生にとって、あるいはそれを指導する教員にとっても、得がたい勉強と経験の場を与えていただいていることを本当に感謝している。KASEIという支援活動を通じて、人の優しさや前向きさに直に触れることは、勇気をもたらす経験である。私たちの活動が、多少なりとも被災者の方々の生きる勇気に寄与していると信じて、実りある活動を続けたい。

災害大国日本における備えとして

2017年7月5日～6日にかけて九州北部豪雨が起り、またしても多くの方々が被災した。その後4つの団地に計107戸の仮設住宅が建設され、KASEIではこれらの仮設住宅団地でも活動を始めた。熊本とは状況が異なることも多く、活動内容も手探りだが、こちらも継続的に支援してゆきたい。

そしてまたこの原稿を書いていた2018年7月7日、さらに大規模かつ広範囲な西日本豪雨が起こってしまった。まだ全ての被災状況は明らかになっていないが、かなり多くの方々が被災者となっていることは確実で、また避難所や仮設住宅が整備されることだろう。

日本は世界的にも類を見ない災害大国である。災害が起きない対策も大切ではあるが、よりレジリエントな社会を作るには、こうした様々な災害が起きることを予め想定し、対策を立てておくことが重要である。KASEIの活動は、当初より熊本地震の仮設住宅が役割を終える3年を目処とすることになっている。しかしKASEIのような仕組みと経験が、今後また起こるであろう様々な災害対策の一つとなることも視野に入れて、KASEI自体の仕舞い方や次へのつなぎ方を考える必要がある。引き続き多くの方々のご支援をいただければ幸いである。

学生代表挨拶

Introduction of Representative student

鶴田 敬祐 Keisuke TSURUTA
2018年度 学生代表
九州大学大学院 人間環境学府 空間システム専攻修士課程

KASEIプロジェクトは建設された仮設住宅を住民の方々の豊かな生活の場にするこへ加勢するというコンセプトのもと2016年の7月に発足しました。私は熊本で生まれ育った者として少しでも被災された方々の力になりたいという思いから、KASEIプロジェクト発足当初から約2年間活動に参加し、現在はKASEIプロジェクト2018年度の学生代表を務めさせていただいています。そしてそのKASEIプロジェクトはもうすぐ発足してから3年目を迎えようとしています。

発足当初の私たちの活動はみんなの家設計のお手伝いや集会所・住戸に不足している家具の作成、外構の整備などといったものが主で、必要とされる支援は明瞭であったように思います。しかし住民の方々の生活がある程度落ち着いてくると、団地ごとの求められる支援に違いが現れはじめ、私たちは住民の方々の声をきめ細やかにくみ取っていき多種多様な活動へ繋げていきました。また、2年目の後半には私たちがやってきたものづくり・ことづくりの支援と並行して、仮設住宅居住者へのアンケート実施やみんなの家の使われ方調査を行い、熊本に供給された仮設住宅で起こっている実態を記録として残すための活動も行ってきました。

このように、私たちの行う支援の形は年を追うごとに変わっていききました。

そして、3年目。早いところでは6月で入居から2年が経つ仮設団地もあります。入居から2年も経過した団地は、私たちが支援を始めたころの閑散とした無機質な団地と比べると着実に住民の方々の生活の場として使いこなされていることが見てわかります。それと同時に自宅再建も進んでおり、仮設住宅を去る世帯もどんどん増えてきています。5月には入居者の減少に伴い、大津町で県内はじめて団地が閉鎖されました。発災から2年経ち新しい復興のフェーズに入ってきて、このように団地にも大きな環境の変化が新たに起きています。そのような状況の中で、私たちに必要とされる支援の形もまた変わってゆくでしょう。過去の災害で行われた活動やこれまでKASEIの先輩方が行ってきた活動をしっかりと引継ぎ、新たな支援へと繋げていきたいです。

KASEIプロジェクトの活動がわずかながらでも被災された方々の復興の力になり、そして今後起こるかもしれない大きな災害への知見として役立つことを願って活動を続けていきます。よろしく願いいたします。

熊本地震現状

Present situation of Kumamoto earthquake

2016年4月に発生した熊本地震から2年が経ち、熊本では復興が着々と進んでいる。県内に建設された仮設住宅4,303戸のうち、現在住まれている戸数は3,276戸まで減少し、簡単に言えば約1,000戸が既にその役目を終えている*1。みなし仮設(借上型仮設住宅)の戸数も、2017年5月の14,923戸をピークに減少に転じ、2018年5月時点で10,548戸となった。仮設の減少をもって復興が進んでいると断ずるのはやや早計ではあるが、既に5,000世帯あまりの人々が仮設的な住まいを離れ、恒久的な住まいへと生活の場を移している。

その復興の進展を後押しするように熊本県各地では、災害公営住宅の建設が進んでいる。県内12市町村で47団地1,733戸の供給が予定されており*2、6月10日には西原村河原地区の災害公営住宅が県内で最初に竣工を迎えた。熊本では、県や市町村による直接建設とともに、公募のうえで民間企業が建設したものを買い取って公営住宅として提供する「買取方式」という供給方法が採用されている。先の西原村の公営住宅も県内の工務店と若手設計者らからなるチームの提案が選ばれて建設されたものである。この2者は仮設住宅や本格型みんなの家の供給にも携わっており、その経験を活かしたいとプロポーザルに臨んだという。特に工務店の方は「熊本型デフォルト」のもとで木造仮設を多数供給しており、下野山田仮設団地以降に建設された木造仮設で採用された「バリアフリー型木造仮設」を設計したことでも知られる。プレハブ建築協会によるプレハブ仮設の標準設計を木造で再現するだけでなく、一般的な木造の構法を採用して住戸内の段差を解消するとともに、車椅子などの必要な世帯に関しては床面積を1.5倍にしたゆとりある平面が実現されている。後のページでも触れるが、これらの設計は熊本地震から1年後に起こった九州北部豪雨被災地の仮設住宅でも採用されるなど、木造仮設の新たな標準設計となり得るものであろう。国も熊本地震での木造仮設の供給を受けて災害救助法の基準を大幅に改正し、仮設住宅の標準規模(1戸当たり29.7m²)を撤廃しており、自治体の裁量に任せた仮設住宅の建設が可能となった。筆者が知る範囲でも、九州の各県と県下の工務店らが災害時の木造仮設の供給を目的とした協定を結ぶケースも増え、その協定のもとで木造仮設の検討が始まっている。『仮設のトリセツ』などで知られる岩佐明彦氏(法政大)の言葉を借りれば、仮設の

「ローカライズ」*3が熊本地震を契機として始まりつつあるといえるだろう。岩佐氏が中越地震の被災者の生活から見出し、熊本型デフォルトやKASEIが目指した「入居後のカスタマイズ」だけではなく、仮設住宅のあり方の抜本的な見直しとなることが期待される。

このように1つのメルクマールとなった熊本の仮設住宅であるが、その居住実態はどのようなものであったのだろうか。KASEIでは、入居から1年以上が経って仮設での生活が落ち着き、支援活動の出番が減少してきたこの2年目に、様々な調査を実施することとなった。支援をきっかけに関係を持った入居者のみなさまからの多大なご協力のもとで、調査を実施することが出来たのはKASEIとして望外の喜びである。この調査は、上の問いに接近することを意図し、県下の仮設住宅全戸へのアンケート調査を皮切りに、アンケートで学生への調査協力を申し出てくださいました100余人の方々へのヒアリング調査や仮設住宅の使われ方調査などへ派生していった。これらの調査研究の成果は、KASEIに参加する各大学研究室の卒業論文や修士論文として発表するとともに、KASEIとしても公表したいと考えている。まずはこの年次報告書に、アンケート調査結果の概要と第8回実行委員会で開催した学生らの研究報告を収録した。熊本での仮設住宅の居住実態を知ることは、今後の仮設住宅のあり方を考える上で有効な情報を提供し得る。3年目を迎えた現在も、入居者の方々の変わらぬご協力を頂きながら調査を継続している。

さて、役目を終えつつあると言える仮設住宅であるが、3,000世帯以上が生活する場であることは間違いない。昨年の年次報告書でも述べた通り、仮設から恒常的な住まいへの移行は、復興の過程で必ず訪れる変化であり、仮設団地の環境にも変化をもたらすものである。全入居者が転出し閉鎖する仮設団地が現れ始め、数軒の入居者を残すのみの団地も多く存在する一方で、未だ多くの入居者が残る団地も少なくない。熊本の仮設団地は戸数の中央値が21戸と半数以上が小規模なものとなっているため、団地ごとの入居率のばらつきは、入居者らの旧居住地の復興の状況によって大きく左右される。特に布田川断層付近に位置する地区は土地そのものへの被害も大きく、住宅の再建には造成や道路敷設を待つ必要があるが、建設業者の不足から工事の入札が不調不落到ち終ることも多いため、コミュニティ継続

型の仮設では、高い入居率を示す場合が多いようだ。

また、熊本型デフォルトが企図した木造仮設の復興公営への転用も新たな局面を迎えている。災害救助法に基づいて建設される仮設住宅が、公営住宅法の基準を満たす必要がある災害公営住宅として運用されるには難があることはよく知られている。仮設の29.7m²という標準規模が公営住宅の面積基準を下回ることがその代表格だが、加えて熊本が木造仮設に採用したRC基礎の配筋量も公営住宅の基準を下回っており、仮設をそのまま復興公営へと転用することは不可能であるという。仮に転用するならば、入居者を一時的に退去させ、界壁の撤去や基礎の改修が必須となる。このような困難に対して熊本では、木造仮設を災害公営ではなく市町村有の単独住宅*4として運用することが検討されている*5。即ち、仮設的な利用を終えた木造仮設を県が市町村に払い下げることで、市町村が独自に定める条例に基づいて運用が可能な住宅とするということだ。これにより、現在の入居者がそのまま仮設住宅に定住することが可能となり、災害公営建設よりも費用がかからずに済む。一方で、民有地や公有のグラウンドなどに建てられた木造仮設は、依然、解体を余儀なくされる状況にある。

このように、標準規模が撤廃された今、仮設住宅のあり方が改めて問われている。構造の選択や建設地の選定、地域の特性を反映した形態、復興公営として転用など、様々な要求に応えられるローカルな設計が待たれる。KASEIもその一助となれるよう、これからも仮設への支援を通して、あるべき被災地復興のあり方を見定めて行きたい。



玄関を引き戸にするなどしたバリアフリー型木造仮設



西原村河原地区の災害公営住宅と集会所



各地で建設が進む災害公営住宅

*1 熊本県：応急仮設住宅等の入居状況について H30.5.31現在)
http://www.pref.kumamoto.jp/kiji_23963.html, 2018.7.31参照

*2 熊本県：災害公営住宅の整備について、
http://www.pref.kumamoto.jp/kiji_19145.html, 2018.7.31参照

*3 岩佐明彦：応急仮設住宅のカイゼン型性能向上の成果と限界、建築雑誌、vol.132, No.1695, pp.24-15, 2017.3

*4 公営住宅は、公営住宅法の規定による国の補助を受け、市町村が建設、買取りまたは借上げを行い、低所得者に貸与または転貸される住宅などを指す。一方で、単独住宅は市町村が単独で費用を賄って建設などを行う住宅を指す。

*5 九州大学末廣研究室のヒアリング調査に基づく。

仮設団地に関する研究発表

Research presentation

研究発表

発表は熊本地震に関連するテーマで8人が行った。まず、最初の3人(加悦、山田、中野/熊本県立大学)は同じ研究方法、フィールドで調査を行っている。

仮設団地における居住者のコミュニティ意識に関する研究-熊本地震発災後の仮設団地を対象とした考察-と題し、加悦由樹が発表。熊本地震で建設された110団地の仮設団地のうち団地規模や入居形態に特徴のある3団地を対象とし、発災前後の人との関わりの変化や仮設団地退去後に、入居者が優先するコミュニティの実態を明らかにすることを目的とした。この論文では、「集団入居制度」という仮の制度を提案する。災害公営住宅に入居する際に、近隣住民の方や親戚など知り合いの方と一緒に同じ災害公営住宅に入居できるという仮の制度である。入居者のコミュニティ実態について、発災後の暮らしの中で、接する機会の多い人について、団地により違いがみられた。このことは、表1のように入居方法の違いが関係していると考えられる。仮設団地退去後に優先したいコミュニティについて、団地規模、入居形態に関係はなく、「地震以前の繋がりを優先したい」という意見も一定数いたが、「仮設団地で出会った人」つまり新たなコミュニティを重視する人も多くいるということが明らかになった。(図1)このような結果は災害公営住宅に入居する際にも役に立つのではないかと考える。ヒアリングからも、災害公営住宅に入居するにあたって、また新たに構築されるコミュニティに不安の声もでていう意見がみられたため、コミュニティを継続したいと考えている人と入居できるといったように、入居者がコミュニティを選択できるような制度があるとよいと考える。災害公営住宅という恒久的な住まいの場所が、入居者にとって少しでも安心できる環境になることが望ましい。

2人目は、仮設住宅団地の入居者の生活再建に関する研究-熊本地震発災後の仮設住宅団地を対象に-と題し、山田大貴さん(熊本県立大学)が発表。仮設団地入居者の生活再建に向けた個々の取り組みを調査し、生活再建に向けた課題を明らかにすることを目的としている。生活再建に関する情報源について、大規模仮設団地は小規模仮設団地に比べ再建に関する情報を比較的入手しやすい状況にあることが明らかになった。団地により違いがみられたため、規模に関係なく定期的に行政の説明会を行うなど、状況にあった情報提供の在り方の検討が必要である。

加悦 由樹 Yuki KAETSU

熊本県 土木部 建築住宅局建築課アートボリス・UD班
2017年度 熊本県立大学 環境共生学部 居住環境学科卒

3人目は、仮設団地における高齢者の外出行動に関する研究-熊本地震発災後の仮設団地を対象とした考察-と題し、中野未香子さん(熊本県立大学)が発表。仮設住宅で暮らす高齢者の発災前後の外出行動の実態を調査し、災害発災後の外出の変化を明らかにすることを目的としている。外出に関して、仮設団地の特徴や年齢、世帯といった居住者の属性によって違いがみられた。研究より、仮設団地に入居して外出が減り、外出のきっかけになる「みんなの家」の利用もない引きこもりがちになった単身高齢者がいることが明らかになった。このような人に対する周りの配慮が特に必要になってくると考える。

4人目は、応急仮設住宅団地における自治会活動に関する研究-益城町応急仮設住宅団地を例に-と題し、津田桂佑さん(熊本県立大学)が発表。今後の大規模災害後に建設される仮設団地内での自治会形成と考慮すべき課題や支援の在り方について考察することを目的としている。団地によって、催事の開催頻度や外部支援団体の介入頻度は異なるが、発災前と比べ仮設住宅における自治会の負担は大きいことがいえる。団地内に複数の自治会を存在させることや地域支えあいセンターと自治会との機能分けを効果的に行うことで自治会の負担軽減につながるのではないかと考える。あらゆる事例を調査、分析を行い仮設住宅の自治会形成に関するマニュアル等をつくるとよい。

5人目は、熊本県応急仮設住宅団地のアンケート調査の報告と題し、石本隆之介さん(長崎大学)が発表。従前コミュニティの維持・円滑なコミュニティ形成に適した配置計画の要件を抽出することを目的としている。従前コミュニティの維持には、入居方法に対する配慮が必要であり、コミュニティ配慮の入居タイプほどコミュニティは拡大する傾向にある。入居後の交流時期は、高齢の単身者・夫婦の世帯で交流が遅れる傾向にあり交流支援が必要である。集会場・談話室は、交流の拠点としての機能を果たしており、加えてごみ捨て場も交流の場となる場合もあることが明らかになった。

次の論文からでてくる「熊本型デフォルト」について説明する。熊本でできた応急仮設住宅団地において、コミュニティ形成を促すために整備された濡れ縁や小路など全ての団地に一律に設けられた初期設定のことをいう。

6人目は、熊本地震仮設住宅における屋外空間の利用実態について-甲佐町白旗・白旗第二仮設団地を対象として-と

団地名	T仮設団地	K仮設団地	H仮設住宅
立地	上益城群益城町小谷	阿蘇郡西原村小森	熊本市南区富合町平原
世帯数	516戸	312戸	27戸
入居方法	益城町全域から入居している	西原村唯一の仮設団地	大半が1つの小学校区からの入居
集合施設	本格的(1) 集会場・60m ² (6) 談話室・40m ² (4)	本格的(3) 集会場・60m ² (1) 談話室・40m ² (3)	談話室・40m ² (1)
イベント開催頻度	毎日/複数のおんなの家にて	月/20~25回	月/6~9回
アンケート配布日	平成29年9月15日	平成29年12月8日	平成29年11月21日
回収率	150世帯(32.3%)	39世帯(14.5%)	17世帯(65.4%)
H30.1.19時点	52世帯配布不可(65歳以上:56%)	45世帯配布不可(65歳以上:72%)	1世帯配布不可(65歳以上:41%)
回答者属性	年齢、家主事者の年齢、性別、現在の家族構成、住まいの工区、住まいの間取り、設住宅入居日、仕事の有無、元々の居住地区、世帯の主な収入源等	住まいの工区、住まいの間取り、設住宅入居日、仕事の有無、元々の居住地区、世帯の主な収入源等	住まいの間取り、設住宅入居日、仕事の有無、元々の居住地区、世帯の主な収入源等
調査内容	①地震前の暮らしについて 1. 家族以外の人と会う頻度 2. 居住地区の活動や行事の参加について 3. 日常生活の中でよく交流、接する人 4. 以前住んでいた住宅形式	②仮設団地での現在の暮らしについて 4. 団地内での他の住民の方との交流について 5. 入居してからの新たな出会いについて 6. 地震前後で人と関わる機会の増減 7. みんなの家の利用 8. 団地での暮らしについて(自由記述)	③仮設退去後の暮らしについて 1. 災害公営住宅について 2. 集団入居制度について 3. 仮設団地を出た後に住みたい場所と住宅形式

表1 仮設団地、アンケート調査概要

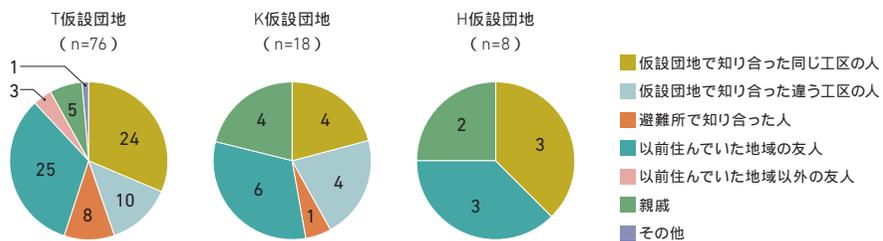


図1 制度をどのような人と利用したいか(複数回答可)

題し、大谷芽生さん(九州大学)が発表。熊本型デフォルトが居住者の日常生活にどう組み込まれているかを把握することを目的とした。白旗・白旗第二団地の場合は、生活の場として居住者のプライベートな暮らしに組み込まれていた。また、日常的な溜まり場を生み出すきっかけとして重要な役割を担っており、集会場とは性格の違う居場所を、選択肢のひとつとして団地の中に提供しているということが明らかになった。

7人目は、熊本地震仮設団地における「みんなの家」の管理運営と利用実態と題し、遠藤由貴さん(九州大学)が発表。みんなの家の利用実態を把握・分析することで、今後の仮設団地における集合施設の計画について知見を得ることを目的とした。みんなの家は支援活動の拠点となっており、存在の有無が支援格差につながっていることが明らかとなった。また、管理体制は市町村によって異なり、それによって日常利用の不可不可や利用手続きに違いがみられるが、多くの団地でみんなの家が住民に普段の居場所として認識されていた。集合施設を有効に利用するためには、ある程度期間を経た後に、地域支えあいセンター等団地の状況を把握している人が、適切な運営・利用方法を考えていくことが重要であると考え。

8人目は、熊本型デフォルトに基づく応急仮設住宅の空間

計画と利用実態と題し、藪井翔太郎さん(九州大学)が発表。熊本型デフォルトの計画策定の経緯と計画内容を把握し、この計画がどのような住環境を形成しているか等を明らかにすることを目的としている。熊本型デフォルトは、構造や規模など様々な条件の団地がある中で、仮設住宅全団地一律のベースアップを実現させると同時に、入居者が生活領域を拡大できる余白空間を生み出していることが明らかになった。一方で、団地規模や入居者の生活によってデフォルトの意図が反映しにくい仮設住宅が存在していたため、今後は、仮設団地内だけで計画するのではなく、様々な条件を考慮した上で、被災者の生活から仮設住宅の在り方を検討する必要があると考え。

感想

再建に関することや熊本型デフォルトについてなど、様々な観点から研究されており研究発表を通して学びが多くあった。また、発表後の質疑応答の時間も、たくさんの質問が飛び交い活発な議論ができ有意義な時間となった。今後起きるかもしれない大規模災害時に、熊本地震の経験からよりよい住環境がつけられるように、広い視点からこれからも考え続けていきたい。

熊本県応急仮設住宅居住者を対象とした全世帯アンケート調査

Questionnaire Survey

佐藤 哲 Satoshi SATO
熊本県立大学 環境共生学部 居住環境学科 准教授

KASEIでは、2017年11月に、熊本県内(熊本市、御船町を除く)の仮設住宅居住者を対象にアンケート調査を実施した。配布数は空き住戸を除き3094戸、回答数は695件、全体の回収率は22.4%であった。

アンケート項目は、I. 家族構成、II. 地震以前の居住状況、III. 地震直後の避難行動、IV. 仮設住宅の入居、V. 仮設住宅での暮らしの変化、VI. 仮設入居後のコミュニティの変化、VII. 復興後の住まいの予定とし、主に世帯主を対象に、家族構成の変化や世帯分離、避難行動、仮設のコミュニティ形成、生活再建など、居住者らの生活を明らかにすることを目的とした。また、仮設団地内に限らず、被災後の環境移行や旧居住地との関係の変化についても考察出来るよう設問を工夫した。

市町村別回答数を図1に示す。被害が大きく、仮設住宅数の多い益城町の回答者が最も多く、ほとんどの自治体で「65歳以上の高齢者」からの回答が多い。

仮設住宅入居前後の家族数の変化を図2に示す。仮設住宅への入居を契機に、「3人家族以上」が減少し、「1~2人家族」が増加している。特に「一人暮らしの高齢者」は倍に増えている。転出した家族の続柄と現在の居住地を図3に

示す。139世帯で196名の転出があり、「30~40代の子」、「60代以上の祖父母、父母、義父母」の転出が特に多い。震災を契機に世帯分離を行い、それぞれの住まいが遠く離れてしまった家族が多い一方で、同一仮設団地内で別れて暮らす事例も一定数見られた。

仮設住宅の退去時期については、調査時点で「予定が決まっている」のは265世帯で、回答者の年代による大きな違いは見られなかった。また、「仮設住宅退去後に住みたい場所」では、344世帯が「震災以前の自宅の場所」を希望しており、職業別にみても「自営業」「公務員」「兼業・専業農家」は6割を超えていた。「仮設住宅退去後に住みたい住宅(図4)では、全体で「新築する住宅」を希望する傾向が強く、「アルバイト」「主婦」「無職」で「復興公営住宅」を希望する意見が他の職業に比べて多い。

KASEIでは、今回得られたデータを、世代別、職業別、団地別等で詳細な分析を行うとともに、個別のヒアリング調査を実施している。特にKASEI活動を展開する団地の居住者の方からの協力が得られることが多く、支援と調査が連続して行えることもKASEIの成果であると考えている。

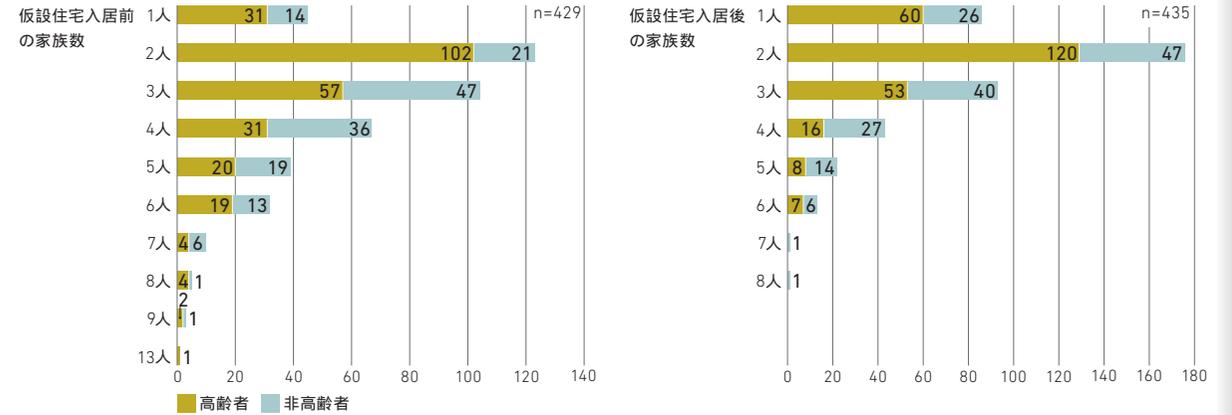


図2 仮設住宅入居前後の家族数の変化

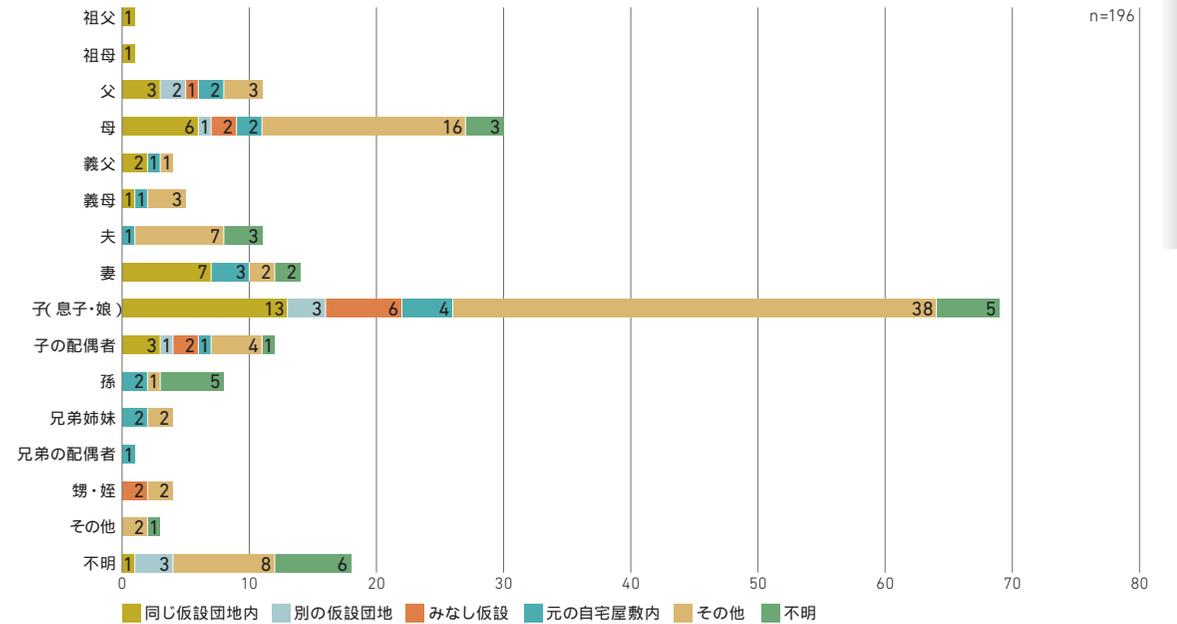


図3 転出した家族の続柄と現在の居住地

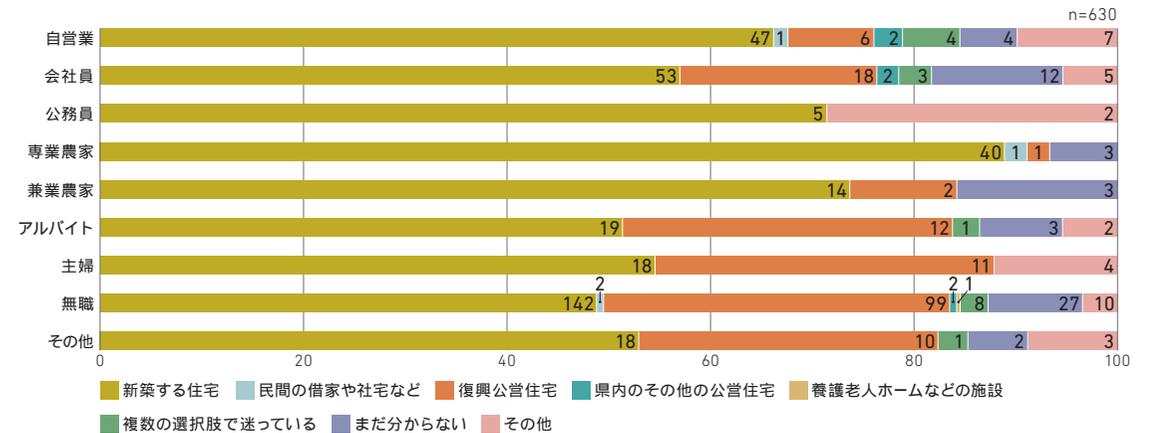


図4 仮設住宅退去後に希望する住居形式

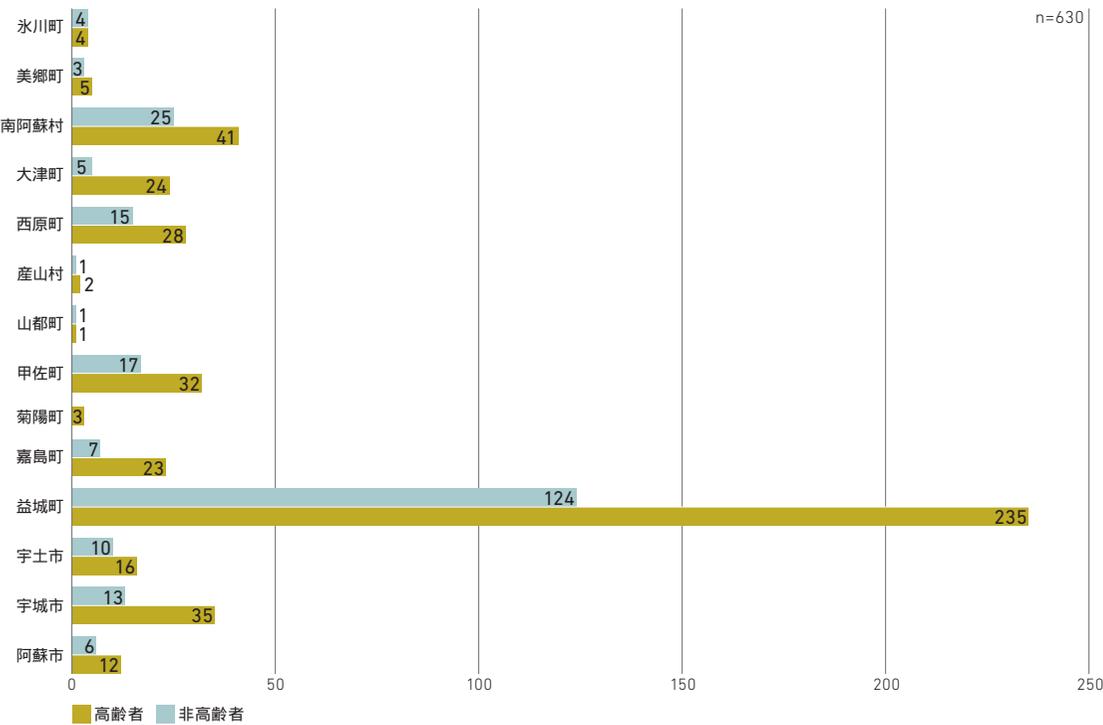
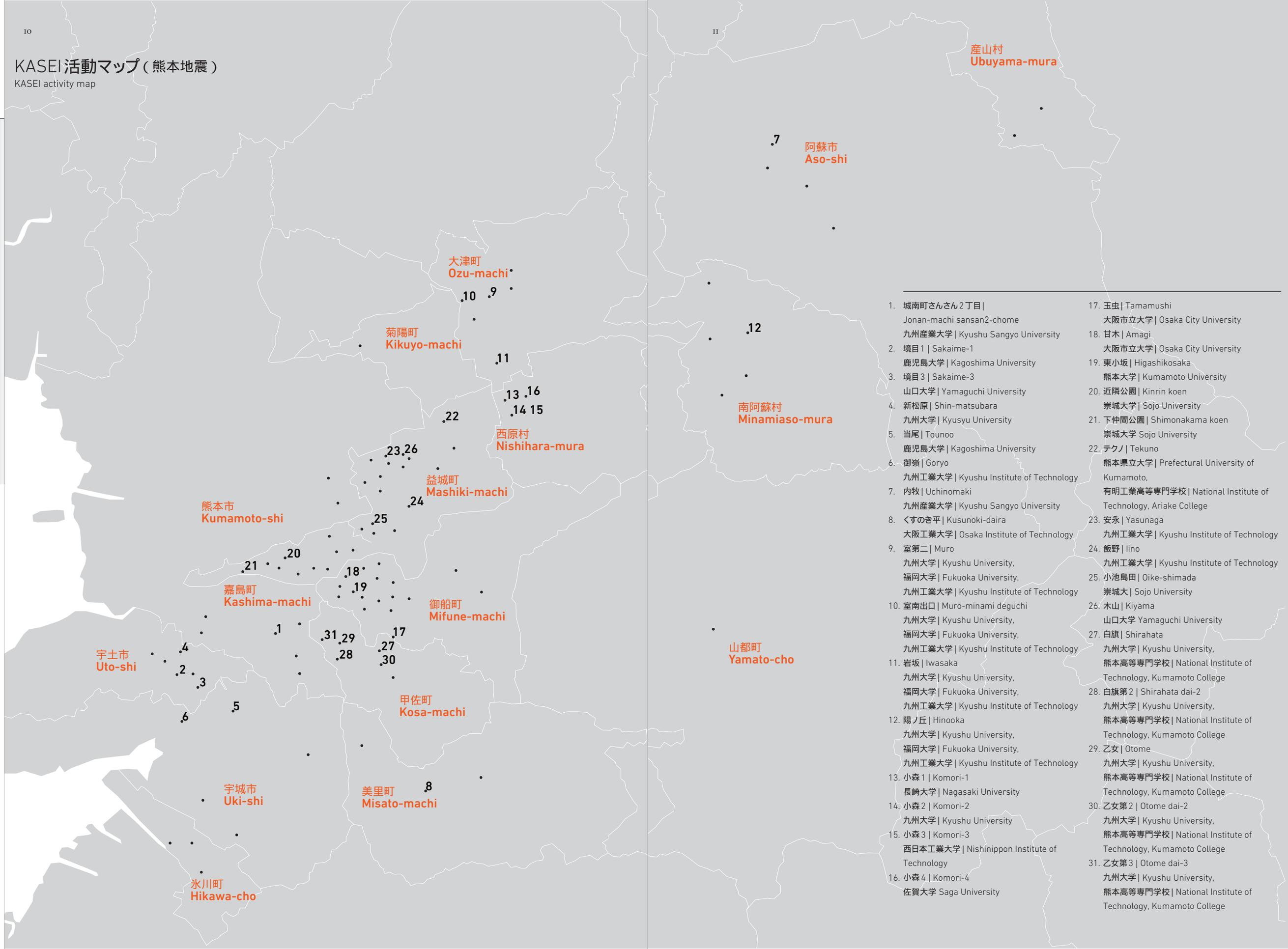


図1 市町村別回答数

KASEI活動マップ(熊本地震)

KASEI activity map

KASEI活動マップ(熊本地震)



- | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 城南町さんさん2丁目
Jonan-machi sansan2-chome
九州産業大学 Kyushu Sangyo University | 17. 玉虫 Tamamushi
大阪市立大学 Osaka City University |
| 2. 境目1 Sakaime-1
鹿児島大学 Kagoshima University | 18. 甘木 Amagi
大阪市立大学 Osaka City University |
| 3. 境目3 Sakaime-3
山口大学 Yamaguchi University | 19. 東小坂 Higashikosaka
熊本大学 Kumamoto University |
| 4. 新松原 Shin-matsubara
九州大学 Kyusyu University | 20. 近隣公園 Kinrin koen
崇城大学 Sojo University |
| 5. 当尾 Tounoo
鹿児島大学 Kagoshima University | 21. 下仲間公園 Shimonakama koen
崇城大学 Sojo University |
| 6. 御嶺 Goryo
九州工業大学 Kyushu Institute of Technology | 22. テクノ Tekuno
熊本県立大学 Prefectural University of Kumamoto, |
| 7. 内牧 Uchinomaki
九州産業大学 Kyushu Sangyo University | 23. 安永 Yasunaga
九州工業大学 Kyushu Institute of Technology |
| 8. くすのき平 Kusunoki-daira
大阪工業大学 Osaka Institute of Technology | 24. 飯野 Iino
九州工業大学 Kyushu Institute of Technology |
| 9. 室第二 Muro
九州大学 Kyushu University,
福岡大学 Fukuoka University,
九州工業大学 Kyushu Institute of Technology | 25. 小池島田 Oike-shimada
崇城大 Sojo University |
| 10. 室南出口 Muro-minami deguchi
九州大学 Kyushu University,
福岡大学 Fukuoka University,
九州工業大学 Kyushu Institute of Technology | 26. 木山 Kiyama
山口大学 Yamaguchi University |
| 11. 岩坂 Iwasaka
九州大学 Kyushu University,
福岡大学 Fukuoka University,
九州工業大学 Kyushu Institute of Technology | 27. 白旗 Shirahata
九州大学 Kyushu University,
熊本高等専門学校 National Institute of Technology, Kumamoto College |
| 12. 陽ノ丘 Hinooka
九州大学 Kyushu University,
福岡大学 Fukuoka University,
九州工業大学 Kyushu Institute of Technology | 28. 白旗第2 Shirahata dai-2
九州大学 Kyushu University,
熊本高等専門学校 National Institute of Technology, Kumamoto College |
| 13. 小森1 Komori-1
長崎大学 Nagasaki University | 29. 乙女 Otome
九州大学 Kyushu University,
熊本高等専門学校 National Institute of Technology, Kumamoto College |
| 14. 小森2 Komori-2
九州大学 Kyushu University | 30. 乙女第2 Otome dai-2
九州大学 Kyushu University,
熊本高等専門学校 National Institute of Technology, Kumamoto College |
| 15. 小森3 Komori-3
西日本工業大学 Nishinippon Institute of Technology | 31. 乙女第3 Otome dai-3
九州大学 Kyushu University,
熊本高等専門学校 National Institute of Technology, Kumamoto College |
| 16. 小森4 Komori-4
佐賀大学 Saga University | |

KASEI活動一覧

KASEI activities list

・ 活動日	・ 2017.04.15	・ 2017.06.08
活動団地	御船町東小坂団地	大津町室第二団地・宇土市新松原団地
活動内容	意見交換会	意見交換会
大学研究室	熊本大学中田研究室	九大・九工大・福大合同チーム
	・ 2017.04.25	・ 2017.06.17
	宇城市当尾団地	白旗第一団地_グリーンカーテンの設置
	花植えと台座設置ワークショップ	九州大学末廣研究室
	鹿児島大学鷹野研究室・第一工業大学	
	・ 2017.04.28	・ 2017.06.30
	甲佐町乙女団地	甲佐町乙女第一団地
	現状調査	糸の鳥よけ
	熊本高専下田研究室	熊本高専下田研究室
	・ 2017.04.30	・ 2017.07.02
	白旗第一団地	宇土市境目団地
	本棚制作	植木鉢カラーペイント計画
	九州大学末廣研究室	鹿児島大学柴田研究室
	・ 2017.05.26	・ 2017.07.10
	甲佐町乙女団地	室第二団地
	ごみ収集所とテーブルのデザインに関する意見交換会	意見交換会
	熊本高専下田研究室	福岡大学四ヶ所研究室
	・ 2017.05.27	・ 2017.07.15
	南阿蘇村	木山団地
	ゴーヤカーテンの設置	風防壁の計画立ち上げ
	九大・九工大・福大合同チーム	山口大学内田研究室
	・ 2017.05.28	・ 2017.07.8-9
	美里町	白旗第二団地
	ゴーヤカーテンの設置	花壇の制作
	鹿児島大学鷹野研究室	九州大学末廣研究室
	・ 2017.05.28	・ 2017.07.21
	宇土市浦田団地	甲佐町乙女第二団地
	植木鉢カラーペイント計画	テーブルの作成・設置
	鹿児島大学柴田研究室	熊本高専下田研究室
	・ 2017.05.30	・ 2017.07.25
	白旗第一団地・乙女第一団地	新松原団地
	グリーンカーテンの設置に関する意見交換会	プッシュ型みんなの家ワークショップ
	九州大学末廣研究室	九州大学田上研究室

・ 2017.07.31	・ 2017.09.30	・ 2018.01.15
室第二団地	甲佐町乙女第一団地	林田団地
意見交換会	鳥よけの確認	今後の活動に関する打ち合わせ
福岡大学四ヶ所研究室	熊本高専下田研究室	九州大学末廣研究室
・ 2017.08.06	・ 2017.11.04	・ 2018.01.30
甲佐町乙女第一団地	テクノ団地	林田団地
ゴミ捨て場の改修	組手什 家具作りワークショップ	テーブル・雨よけ設計の打ち合わせ
熊本高専下田研究室	熊本高専下田研究室	九州大学末廣研究室
・ 2017.08.23	・ 2017.11.08	・ 2018.02.17
御領団地	御領団地	御領仮設団地・曲野長谷川仮設団地
縁側の床張り作業	お茶会	家具づくりワークショップ
鹿児島大学	鹿児島大学鷹野研究室	鹿児島大学鷹野研究室
・ 2017.09.10	・ 2017.11.19	・ 2018.02.23
木山団地	木山団地	林田団地
風防壁	靴棚製作ワークショップ	折り畳みテーブルのモックアップ
山口大学内田研究室	山口大学内田研究室	九州大学末廣研究室
・ 2017.09.22	・ 2017.11.23	・ 2018.03.9-10
内牧団地	甲佐町乙女第一団地	大津町室第2仮設団地
鍵渡し式	鳥よけの補強	みんなの家外壁塗装
九州産業大学矢作研究室	熊本高専下田研究室	福岡大学四ヶ所研究室
・ 2017.09.22	・ 2017.12.17	・ 2018.15,17,18
林田団地	頼田団地	大津町室第2仮設団地
集会所完成パーティー	餅つき	みんなの家外壁塗装
九州大学末廣研究室	福岡大学四ヶ所研究室	福岡大学四ヶ所研究室
・ 2017.09.26	・ 2017.12.23	・ 2018.03.21
木山団地	林田団地	南阿蘇村陽ノ丘・長陽運動公園仮設団地
風防壁の設置	餅つき	団地現状調査
山口大学内田研究室	九州大学末廣研究室	九州大学芸工チーム
・ 2017.09.26	・ 2017.12.28	・ 2018.03.26
頼田団地	岩坂団地	宇城市小川団地
意見交換会	餅つき	組手什ワークショップ
福岡大学四ヶ所研究室	九州工業大学徳田研究室	鹿児島大学柴田研究室
・ 2017.09.30	・ 2018.01.12	・ 2018.03.26
白旗第二団地	東峰村	林田団地
折り畳み式テーブルの設計	ヒアリング調査	屋外用テーブル作成
九州大学末廣研究室	九州産業大学矢作研究室	九州大学末廣研究室

甲佐町白旗団地

Kosa-machi Shirahata

九州大学 末廣研

2年目最初の活動は、4月に規格型みんなの家での本棚製作から始まりました。押入れが大きく物をうまく収納できないとの声がありました。そのために奥行きがある押入れに前後2つの棚を作り、前の棚はスライドができる仕組みを考えました。1日の最後にみんなの家でグリーンカーテンを設置することを提案すると喜ばれたので、次回の活動につなげていきました。

5月にみんなの家にグリーンカーテンの設置を行いました。初めてグリーンカーテンを行ったので、現地にいらっしゃった甲佐町地域支え合いセンターの方々と一緒に作業をし、自分たちも学びながら、住民の方から話を聞きながら行いました。この時にみんなの家だけでなく各住戸にも設置して欲しいとの声が多く聞こえたので、希望者アンケートを行い、次回の活動で各住戸にも設置することにしました。

アンケートを元に、6月下旬に各住戸にグリーンカーテンの設置を行いました。各住戸にゴーヤ2苗と朝顔1苗を配り作業をしていると、育ったゴーヤをどう料理しようか、ゴーヤだけではなくて朝顔があることで色が楽しめるなど、住民の方々が楽しそうに話しかけて下さいました。作業終了後は、子供たちと遊び、夜は毎月開かれているイベントに招いていただき、団地での賑やかな食事風景を見ることができました。

2年目を振り返ってみると、活動中に住民の方とコミュニケーションをとることで、次回の活動につなげられるよう、自分たちから住民の方に活動を提案することが多くなったように思います。徐々にKASEIの活動は減ってきていますが、住民の方との信頼関係は大きくなってきて、飲み会などにも誘われるようになりました。今後も一人ひとりとのつながりを大切に住民の方々をサポートしていきたいと思ひます。

[Column] 学生の声

KASEIで学んだのは信頼の大切さです。住民の方からの信頼があってこそ、ものづくりの可能性が広がるのだと実感できます。0から1を築いてくれたのは先輩方。それを忘れずしっかり引き継いでいきたいです。

九州大学 末廣研 B4: 大谷 芽生



本棚作成



グリーンカーテン設置



作業後に住民の方とお話し

[Column] 学生の声

住民の方が本当に必要としていることを自分たちで考え提案する大切さ、大変さを実感しました。そのように住民の方の支援を行いながらものをつくる過程で、様々なことを学ぶことができ、自分の成長にもつながりました。

九州大学 末廣研 M1: 河村 悠希

甲佐町白旗第2団地

Kosa-machi Shirahata dai-2

九州大学 末廣研

2年目に入り、白旗団地では第一団地から第二団地へ活動範囲を広げていきました。

6月下旬に各住戸にグリーンカーテンの設置を行った際に、第二団地にも設置をして回っていると、住棟間に簡易的な屋根をつけて、みんなが集まる場所ができていたことを発見しました。第一団地にはみんなの家や花壇があり、住民の方が集まる場所があるのですが、住戸数が少ない第二団地には、みんなが集まる場所が少ない状況でした。

そこで、7月8-9日に花壇制作を行いました。住民の方が集まることのできる場所になればと思い、ベンチ付きの花壇を2つ作りました。住民の方が土を用意してくれたり工具を貸してくれたり、色々と協力をしていただいたことで、スムーズに作業が進みました。事前にチラシでお花植えを告知していたので、当日は住民の方が集まってくださり、また子供たちも参加をしてくれて、楽しく賑やかな雰囲気となりました。以前発見した住棟間にできたみんなの居場所では、住民の方がお菓子や飲み物を持ち寄って集まったり、お気に入りの写真を貼ったりと、自分たちでより楽しくしようとする住民の方々のバイタリティの高さを感じました。

元気な住民の方々の手助けとなるように、9月に屋外でも使える折りたたみテーブルの作成を行いました。後からこの折りたたみテーブルは、団地内でお月見会を開いた際に使っていただいたとお聞きして、作ったものが団地内の交流のきっかけとなることは、とても嬉しく思いました。

第二団地の方々はこの仮設住宅で初めて出会う方々がほとんどですが、とても仲が良く、逆にこちら側が元気をもらうことが多くありました。バイタリティに富んだ住民の方に対して、さらに加勢していく手助けができたのではないかと思います。



末廣 香織 | Kaoru SUEHIRO
九州大学 准教授 | Kyushu University, Assoc. Prof.

[Column] 学生の声

何か特別な時間をつくるというよりも、他愛ないお話をしたり、住民の方に寄り添う時間を一番考えたいと思いました。今後も住民の方々と一緒に過ごす時間を大事にして、活動に取り組んでいきたいです。

熊本高専 下田研 AP2: 許斐ももこ



手作りみんなの家



ベンチ付き花壇作成



折りたたみテーブル作成

九州大学 末廣研究室・遠藤 由貴、谷口 和弘、鶴田 敬祐、Ester Peralta、河村 悠希、大谷 芽生、吉岡 大貴 (趙研究室)

甲佐町乙女第1・乙女第2・乙女第3団地

Kosa-machi Otome dai-1,dai-2,dai-3

熊本高専 下田研

私たちは昨年より新たに、一昨年ごみ収集所の修繕を行った第3乙女団地に加え、第1,2団地にその活動の範囲を広げました。まず現状を把握するために私たちは、各団地に対し、みんなの家や日常生活に関する聞き取りを行いました。その結果、第1団地では、みんなの家の玄関の母屋部分に鳥が巣をつくるため、糞害を受けていること、ごみ収集所を猫が荒らし困っていること、第2団地ではみんなの家で使用しているテーブルと椅子の高さが合っていないため、高齢者が使いづらいという問題が挙げられました。これらの問題を踏まえ私たちは、第1団地に対し、鳥の巣対策とごみ収集所の修繕、第2団地に対し、みんなが椅子に座り囲むことのできるダイニングテーブルの製作をそれぞれ行うこととしました。5月に住民の方とデザインや機能に対する意見交換を行い案を決定し、6月から8月にかけて実際に作業を行いました。作業には住民の方にも参加していただきました。その中で、ある住民の方が「自分が使うものを自分でつくことはやりがいがあり楽しい」とおっしゃっており、「ものづくり」に住民の方が参加することの意義を強く感じました。10月には完成物の経過を見ることを目的に、お茶会を開催しました。そこで鳥の巣がまたつくられるようになったとのことだったので12月に再度改修作業を行いました。その他のものについては、特に問題はなく、日常生活において非常に役立っているとのことだったので、これらの「ものづくり」が仮設住宅でのよりよい生活に対し、少しでも力添えができたのではないかと考えています。



ゴミ収集所の修繕案についての意見交換



ダイニングテーブルの制作



完成後の様子



下田 貞幸 | Sadayuki SHIMODA
熊本高等専門学校 教授 | National Institute of Technology, Kumamoto College, Prof.

熊本高専 下田研究室・許斐ももこ、西田みずき、藤井祐稀
熊本高専 浦野研究室・永野蓮太
熊本高専 松家研究室・藤掛佑基
熊本高専 入江研究室・井島拓也
熊本高専 上久保研究室・松田崇志

熊本高専 岩坪研究室・吉村龍
熊本高専 勝野研究室・小嶋晃平

益城町安永・飯野小団地

Mashiki-machi Yasunaga, Iinosho

九州工業大学 佐久間研

私たちはこれまでに飯野小学校仮設団地に訪れ仮設団地の方々と話していく中で、みんなの家の縁側を拡張してほしい、団地の敷地内に子どもの遊び場や大人の休憩場所をつくってほしいなどの要望を受けていました。実施に向けて計画を立てる中で、自治会長の草野さん、益城町で日曜大工のボランティア活動をされている大石さんたち、首藤工務店さんの協力が得られ、7月21日～24日にこれらの実施を行いました。

みんなの家の縁側の拡張、子供の遊び場の作成では、工務店さんの指導を受けながら、基礎の設置から束柱や床版の切り出し、着色まで行いました。これらの作成では熊本大学田中研究室の皆さんにも手伝っていただきました。施工に関して十分に計画を立てて臨みましたが、実際に作るのは難しく、特に基礎を水平につくこと、部材を切り出すことは学生だけではとても時間がかかり、工務店さんの技術がなければ終わらなかったと思います。

また作業中、住民の方が現場へ差し入れを持って来てくださることが何度もありました。最終日には仮設団地の方々にカレーライスを作ってください、みんなでいただきました。

縁側や子供の遊び場がどんな風に利用してもらえるのかも兼ねて、これからも伺いたいと思います。



みんなの家の縁側を拡張



子供の遊び場



食事会の様子



佐久間 治 | Osamu SAKUMA
九州工業大学 教授 |
Kyusyu Institute of Technology, Prof.

[Column] 学生の声

今思うと、これだけのものを完成させることができたことが驚きです。完成までに多くの人に関わっていくその過程が、とてもいい経験となりました。これからも自分たちにできることをやっていたいと思います。

九州工業大学 佐久間研 M1: 松山 裕生

九州工業大学 佐久間研究室・今井 智也、徳永 晋、野口 亮太、松山 裕生、池尻 賢矢、石川 龍、井藁 大希、西田 淳

西原村小森団地

Nishihara-mura Komori

九州大学 菊地研
佐賀大学 平瀬研
長崎大学 安武研
西日本工業大学 岡田・三笠研

西原村小森団地での2017年度の活動は、グリーンカーテンの設置から始まりました。仮設住宅では、夏の暑さに対して南側の掃出し窓に簾を設置するなどの工夫が見られます。KASEIでは、熊本県環境立県推進課が甲佐町の仮設住宅にグリーンカーテンを設置するお手伝いをした際、「なるべく多くの仮設住宅にグリーンカーテンを設置したいが人手が足りず難しい」という声を聞き、西原村でのKASEI活動に繋がっていきました。

まず、B棟の自治会長の住戸とみんなの家談話室に見本としてグリーンカーテンを設置させてもらい、チラシを通して希望者を募りました。最初に集まった希望はB棟82戸中10戸程度でしたが、連日、仮設団地内で活動をしていると、自分の所にも設置してほしいという声を次々に頂き、最終的には25戸に設置することになりました。各戸を回って設置をしながら、濡れ縁で居住者の方とお茶やお菓子をいただき、お話をし、仮設団地内で遊ぶ子供たちとゴーヤの苗を植えてまわりました。居住者の方の中には農業をしている方も少なくなく、夏の終わりには青々と茂るグリーンカーテンに小振りながら多くのゴーヤの実が生るお宅も出て来て、「ありがとね。ゴーヤが出来たよ。今晚早速いただきます」と収穫のお電話をくれる方や「畑があるから仮設でゴーヤを育ててもねえと思っていたけど、毎日水やるのが楽しい」と仰る方もいました。

また、そうやって居住者の方々とお話をしていく中で、団地内の課題も見えてきました。例えば、小森第2団地の本格型みんなの家は子供たちの遊び場となってきましたが、子供たちが全力で遊んだあと、片付けをせずに帰ってしまい、みんなの家の内も外も散らかったままとというのが常態化していました。このみんなの家は集落復興の会議の場とし



設置する家の住人さんだけでなく近隣の方にも気にかけて頂いた



子供たちは自分が植えた他の家のゴーヤにも毎日水やりをしたそうだ



おもちゃが散らし閉鎖されそうになったみんなの家



菊地 成朋 | Shigetomo KIKUCHI
九州大学 教授 | Kyushu university, Prof.



黒瀬 武史 | Takefumi KUROSE
九州大学 准教授 | Kyusyu University, Assoc. Prof.



安武 敦子 | Atsuko YASUTAKE
長崎大学 准教授 | Nagasaki University, Assoc. Prof.



内田 貴久 | Takahisa UCHIDA
内田貴久建築設計事務所 |
Uchida Architect Design Office

でも使われるため、このままではみんなの家を施錠し子供たちの利用を禁止せざるを得ない、とは管理人の談。

この状況を踏まえ、KASEIでは、子供たちと一緒に片付けをするWSを企画しました。当初は子供たちが集まってくれるかどうか心配していましたが、当日最初に来てくれた小学校高学年の女の子が「みんな呼んでくる」と言って団地内を周り、たくさんの子供たちを引き連れて戻って来てくれたお陰で、WSは賑やかに始まりました。WSに集まった子供たちは最初いつも通り遊び始めましたが、私達が子供たちと遊びつつ「ほら片付けるよ」と声を掛けながらおもちゃを整理していると、次第に子供たちも片付けをするようになっていきました。先の年長者の女の子が「このおもちゃは使う?」と聞けば、下級生の子たちは「これは要る!」「これは遊ばない」と次々に選別していきました。そうして、最初は遊んでいた子供たちも自ら箒を持って床を掃いたり、窓ガラスに洗剤で絵を描きつつ拭き上げたりと、みんなで協力しながら掃除をするまでになっていきました。最後に、おもちゃを片付ける定位置を決め、みんなの家に取まりきらない使わないおもちゃを倉庫に片付けると、みんなの家は秩序ある綺麗な状態になりました。

その後、みんなの家を訪れると、時には荒れた日もありますが、おもちゃは定位置に収まり、綺麗に維持され、子供たちが集まって遊ぶ姿を見ることが出来ます。「私が仮設にいる間は、ちゃんと見張ってるね」という女の子の台詞が印象的でした。



岡田 知子 | Tomoko OKADA
西日本工業大学 教授 |
Nishinippon Institute of Technology, Prof.



三笠 友洋 | Tomohiro MIKASA
西日本工業大学 准教授 |
Nishinippon Institute of Technology, Assoc. Prof.



平瀬 有人 | Yujin HIRASE
佐賀大学 准教授 | Saga University, Assoc. Prof



片付けする子と遊ぶ子



本格的な夏が到来する前に冬のカーペットも片付けた



お片付けWSから数週間後のみんなの家

[Column] 学生の声

第2団地を訪れると、いつも子どもたちが遊んでいる姿が見られます。今回、その子どもたちと一緒にみんなの家の使い方について考えながら、お片付け会を行ったことで子どもたちとの交流ができたと思います。

九州大学 菊地研 M1: 沼口 悠太

九州大学 菊地研究室・
野口 雄太、前川 遥奈、丸山 千尋、藪井 翔太郎、片岡 美佳、沼口 悠太、
春山 詩菜(黒瀬研究室)・
佐賀大学 平瀬研究室・
広谷 洗多、林田 大晟、江崎 史浩、岳 嘉麟、中村 実咲、永山 貴規

宇土市境目第2・境目第3団地

Uto-shi Sakai dai-2,dai-3

山口大学 内田研

境目団地では、第2団地と第3団地において、みんなの家づくりワークショップからはじまった。事前の現地調査による初期提案を行い、模型と図面を囲み、団地での暮らしの様子を聞きながら、新しいみんなの家には何が求められているかを探っていった。例えば、第2団地には若者が多く、第3団地では高齢者が多く住まわれていた。仮設住宅に暮らす住民同士は、必ずしも震災前にご近所づきあいがあると限らず、「みんなの家」には住民同士の交流を深めるための役割も一部担っているようにも感じられた。

その後、みんなの家が竣工し、完成パーティーを開いたのは、次年度の4月に入ってからのこと。その会では、お祝いはもちろんのこと、これからのみんなの家の使い方についても少し話し合った。鍵はどのように管理するのか、いつもイベントの幹事となる人はいるのか、掃除は誰がするのか、ごみはどこで処理するのかなど、具体的な運営方法について住民と再確認し、情報を共有した。

みんなの家での暮らしについて考えている傍らでは、山口大学名誉教授の内田文雄氏と西山英夫氏による災害公営住宅プロジェクトが着々と進められ、ワークショップ後には現場見学もさせていただいた。その頃は基礎の鉄筋が組み立てられ、コンクリートが打設される手前のものと、木造の軸組みが組みあがっているものまであり、木造住宅の設計を勉強するには最高のタイミングであったように思う。その約1か月後、全体の軸組みが完成し、上棟式を行った。市役所の方々も含め、総勢400名以上の住民が集まり、屋根にのぼり、餅をまいた瞬間、それまで建設途中で足場に囲まれた現場が、途端にステージと化した空間は爽快感に満ち溢れており、同時に今後の地域づくりに期待感を抱いた。



宇土市境目第2仮設プッシュ型みんなの家



宇土市境目第3仮設プッシュ型みんなの家



災害公営住宅 上棟式

[Column] 学生の声

プロジェクトに参加して、作業をしながら直接住民の声を聞くことができ暑い日も楽しく頑張ることができました。これからも少しでも住民の方の住環境の改善、憩いの場となる協力ができたらなと思っています。

山口大学 B4: 呉 英里子

[Column] 学生の声

風防壁の設置では取り付け後の住民の喜んだ顔が私たちのやりがいとなり、組手仕のワークショップでは住民と一緒に製作し、住民と楽しく活動でき、ただ単にものづくりでなく、ことづくりの重要性を感じました。

山口大学 M1: 高橋 弦士朗

益城町木山団地

Mashiki-machi Kiyama

山口大学 内田研

昨年8月に現地調査に伺ったとき、復興支援福岡のボランティアの方が、団地内に風防壁を設置していると知った。風防壁は単に風を防ぐだけでなく、玄関先の雨をしのぎ、収納空間を増やすというメリットもあるようだ。また、団地内にはまだ未設置の住戸も多くあり、人手を必要とされていたため、KASEIも協力させてもらうことになり、9月に2度にわたり風防壁づくりに取り組んだ。作業は製材からはじまり、防腐加工を施し、木枠をつくるまでを午前中に済ませ、昼休みには住民の方のご厚意でお料理をごちそうになった。午後からは、いよいよ設置作業となり、ボランティアの方から設置方法のレクチャーを受け、3人でひとつに30分ほどかけ、合計20戸の風防壁を設置した。

活動の最中、地域振興局にて地域産木材を活用した「組手仕」という接着剤が必要ない家具キットによって靴棚をつくるワークショップを企画していた。その際、部材のカットに必要な機材を、風防壁でお世話になったボランティアの方に用意していただくことができた。また、地域振興局とボランティアの方はこれをきっかけとしてつながったこともあり、KASEIという存在が偶然にもパイプ役を担うことができたといえる。こちらは時間を置き、1か月前にチラシで宣伝したのちに11月に集会所「みんなの家」にて実施した。当日は45名が参加し、参加を希望していたが都合が合わなかった方のために必要な長さにカットした家具キットを30セット作った。

2つの大きな活動では毎回最後に、みんなの家やその周りで子供たちを遊ぶのがお決まりだったが、当初のみんなの家の設計趣旨でもあった「公民館のような大広間での活動と子供が安心して遊べる環境づくり」が自然に再現されたことには感動した。



内田 文雄 | Fumio UCHIDA
山口大学 教授 | Yamaguchi University, Prof

[Column] 学生の声

KASEIという学生主体のプロジェクトに参画したことで、様々なつながりが生まれました。その瞬間がある一方で、仮設であろうと住民にとってはすべてが本物であり、かけがえのない時間を生きているのだと感じました。

山口大学 内田研 M2: 今富 良介



みんなの家で子どもと遊ぶ



風防壁づくり



組手仕による靴棚づくり



西山 英夫 | Hideo NISHIYAMA
西山英夫建築環境研究所 |
Hideo Nishiyama & Associates, Architects

山口大学 内田研究室・今富 良介、高橋 弦士朗、中尾 汐里、瀬戸口 佳奈美、菅元 翔、吉永 裕樹、小崎 由香、赤松 恵、小坂 祥太、黒田 百夏、花野 修平、三崎 令羅、石口 真菜、安部 彩華、新垣 大貴、塩谷 玲奈、中村 勇志、呉 英里子、北村 祐樹、中谷 壮悟、濱 友彦、蒲池 航洋

益城町テクノ団地

Mashiki-machi Tokuno

熊本県立大学 佐藤研
有明工業高等専門学校 藤原研

2017年の活動は、2016年に比べて「ことづくり」の活動も増え、「ものづくり」と「ことづくり」両面から活動を行いました。

ことづくりの活動は主に自治会の方々が主体となり、私たちはそのサポートという形で活動しました。さくら祭り・夏祭り・秋祭り・運動会など自治会主催のイベントはみんなの広場で多数行われました。これらのイベントは、できるだけ外に出てきて顔を見せてほしいという自治会長の強い想いのもと開催されました。回数を重ねるごとに参加人数は増えて盛り上がっていたように感じました。特に、工区対抗の運動会では、住民の方々は工区で団結し活気溢れていて、大規模団地だからこそできたイベントだったと思いました。また、ただイベントに参加するだけではなく、事前準備や片付けに自治会以外で積極的に参加する方が徐々に増えていました。学生たちはイベントに参加することで住民の方とお話できたり、子供たちとたくさん遊んだり、私たちにとても楽しい交流の場でした。

8月20日から24日、芝浦工業大学の学生約20名が益城町テクノ団地に訪れました。私たちテクノチームからは約25名が参加し、総勢50名ほどの大きな合同プロジェクトとなりました。本格型みんなの家を設計された岡野道子さんが現在特任准教授をされているということで、この合同プロジェクトが計画されました。活動は4チームに分けて行いました。1チーム目が本格型みんなの家の隣の芝張り、2チーム目が二輪ボードで遊ぶ子供たちのためのスロープ製作、3チーム目がE談話室に設置する子供用の家具製作、4チーム目が広場の看板製作と拡声機の収納ボックス製作を行いました。熊本での作業を進めるにあたって事前に、学生同士で連絡を取り企画の内容を詰めていきました。作業自体は5日間という短い時間ではありましたが、学生同士で



桜まつり 住民の方が作った横断幕



夏祭り 出店を手伝う学生



芝浦工業大学との合同プロジェクト みんなの広場の看板

[Column] 学生の声

今年は「加勢」について考えた一年でしたが、組手仕WSなどのことを考えると「モノづくり」はいつになってもある程度の需要があることがわかりました。今後必要な「加勢」とは何なのか考えていきたいと思います。

有明高専 藤原研 B5: 中川智哉

[Column] 学生の声

今年は、今までのWS等で作った家具のメンテナンスに行く機会が多かったです。継続することの大切さを知り、また、自分達の作った物が使われ、役に立っていると感じKASEIに参加出来て良かったと思います。

熊本県立大学 佐藤研 B4: 西口昂輝

話し合いや試作を重ね、最後には譲渡式を開催し、住民の方の前で発表をさせていただきました。共に作業をしたことで学生同士の交流もあり、予定していた成果物も5日間で製作が終わり、充実した活動だったのではないかと感じました。

9月9日、コンソーシアムひょうご神戸の学生がイベント開催のため訪れました。テクノ団地の住民の方々と交流をしたということで、子供向けと大人向けそれぞれのイベントが開催されました。子供たちとは、みんなの広場で水遊びやスポーツなど、たくさん体を動かして遊びました。イベント開始時点では2、3人しか子供はいませんでした。呼びかけを行ったり、子供たちが友達を呼んだりして、20人近くの子供たちと交流できました。大人の方達、主に高齢者の方とは本格型みんなの家で、オーナメントやアロマキャンドルづくりを行いました。学生たちと交流しながら、思い思いのものを作られていました。完成品はとても綺麗で住民の方も喜ばれていました。交流の場を設けることで、住民の方同士でコミュニケーションをとることができていたと感じました。特に子供たちは、広場でたくさん遊ぶことで楽しさを覚えて、今後も積極的に遊ぶことが増えると良いなと思いました。

11月4日、テクノ団地では第2回目となる組手仕WSを学生約20名と熊本県県央広域本部上益城地域振興局農林部林務課の幸田享子さんをはじめとした職員3名の方々と共同で開催しました。第1回の開催から「もう一度行ってほしい」との声が住民の方から多く寄せられ、それに応える形で開催しました。このワークショップ(以下:WS)では住民の方々にもものづくりを楽しんでもらうということはもちろんのこと、WSを通した新たな友人作りの場を提供することを目的としました。一度開催しているため、準備はスムーズに進



芝浦工業大学との合同プロジェクト 2輪ボード用のスロープ



芝浦工業大学との合同プロジェクト みんなの家の隣に芝張り



コンソーシアムひょうご神戸 大人の方とのイベントの様子



佐藤 哲 | Satoshi SATO
熊本県立大学 准教授 |
Prefectural University of Kumamoto, Assoc. Prof.



藤原 ひとみ | Hitomi FUJIWARA
有明工業高等専門学校 助教 |
National Institute of Technology, Ariake College
Assist. Prof.

み多くの学生の協力を得ることができました。今回のWSは30世帯限定の事前予約制として、まだ参加したことのない住民の方を対象としました。10月に行われた自治会にてWSの説明を行い、作成したチラシの配布を依頼したところ翌週には「参加したい」といったメールが多く寄せられ、WS開催の2週間前には定員とした30世帯が埋まってしまい、それ以降は当日のキャンセル待ちという形で答えざるを得ませんでした。WS当日は会場の「本格型みんなの家」が多くの住民の方で賑わい、それぞれの世帯の希望の家具や「柵」「靴箱」といった事前に準備しておいたものなどの製作を行いました。当日は林務課の方々や参加した学生の協力もあってキャンセル待ちの方々にも対応することができ、WSとして成功したと思います。このWS全体を通して「ものづくり」の素晴らしさを感じました。

今後は仮設住宅を退居される方が増え、空き住戸が目立ってくるのではないかと思います。特にテクノ団地が大規模団地であるため、住民の方が減ったときの寂しさはより大きく感じるのではないかと懸念されています。住環境を改善することを目的としているKASEIとして、この問題と向き合い今後も活動に努めていきます。



コンソーシアムひょうご神戸 学生と遊ぶ子供たちの様子



組手什 WS 受付の様子



組手什 WS 記念撮影

熊本県立大学 佐藤研究室・小濱 光時、宇治野 里帆子、加悦 由樹、金城 正汰、津田 桂佑、鳥越 柚子、中野 未香子、山田 大貴
熊本県立大学 鄭研究室・高島 遥、平山 響子
熊本県立大学 環境共生学部居住環境学科・加藤 里恵、金氏 竜哉、川嶋 梨月、児玉 誠二郎、田上 雄基、西口 昂輝、野田 歩実、福住 陽太、藤本 功大、松岡 紗生、飯星 裕貴、緒方 優風、加藤 瑠華、高沢 香苗、田北 美早紀、新山 舞、野崎 由佳、野田 理子、長谷川 侑希、松永 亜由美、松藤 優紀、山口 弥桜、山崎 朱音

熊本県立大学 上拂研究室・森内 貴士
熊本県立大学 澤田研究室・境 大介、橋本 康隆、濱田 兼士朗、竹本 雛子
熊本県立大学 総合管理学部 総合管理学科・阿部いづみ、蛭子裕士
有明高専 藤原研究室・大政 凧、柴田 逸希、中川 智哉、吉村 春香、渡邊 大貴、池上 大智、宮田 紳太郎

宇土市新松原団地

Uto-shi Shinmatsubara

九州大学 田上研
福岡大学 四ヶ所研
九州工業大学 徳田研

2017年7月25日、宇土市新松原の「みんなの家」を考える意見交換会を住民の方と設計チーム(田上健一、朝廣和夫)と学生で行いました。17名の住民の方と熊本県職員、宇土市職員に参加していただきました。

宇土市における都市形成の歴史や敷地条件を踏まえて三角形プランの模型を持参し、植栽の管理をはじめとした「緑の活動」によって地域の一体感が高まりコミュニティの継承につながることを期待して提案を行いました。図面や模型、外構・植栽の計画案を見ながら、グループを作り学生と住民で意見を出してもらい、意見として「みんなで集まってお茶飲みながらお喋りできる場が欲しい」、「管理しやすく、他にはない植栽が欲しい」ということが挙げられました。また、新松原の「みんなの家」は、仮設団地の撤去後も地域住民の公民館として使用されるので「婦人会、老人会のような組織も作って欲しい」などの場に対する意見だけでなく、交流に関する意見も出されました。意見交換会で、出された意見をポストイットにまとめ、模造紙上にわかりやすくレイアウトしグループごとに意見の発表を行い、計画の参考としました。

そして、完成式では花壇づくりを行いました。花壇作りには子供達にも参加してもらい、水やりまでを学生と一緒に行いました。完成式での自治会長さんの「復興のシンボルとしてたくさん使います!」というご挨拶がとても嬉しかったです。完成式後は、住民の方とお昼ご飯を食べ「元気をもらった」などのお言葉を頂き、少しでも力になれていて嬉しいとともにこれからの活動の活力となりました。



意見交換会



花壇WS



完成式

[Column] 学生の声

今年度は、仮設団地での餅つきのお手伝いなど、団地の方からお願いされる活動もありました。今後も被災地からの声に耳を澄ましなが、できる限りのサポートを続けていきたいと思っています。

九州大学 田上研 M1: 福田 健

[Column] 学生の声

熊本に行く、いつも私の方が元気をもらいます。新松原のみなさんとの縁を大切にしながら、みんなの家をたくさん使ってもらえるよう、わたしたちができること、本当に必要とされていることを考えていきたいと思っています。

九州大学 田上研 B4: 中原 有理

南阿蘇村室第2団地

Minamiaso-mura muro dai-2

九州大学 田上研
福岡大学 四ヶ所研
九州工業大学 徳田研

室第二仮設団地は、大津町に飛び地で設けられた南阿蘇村の仮設団地で、全13戸の仮設住宅が整備された小さな仮設団地です。団地前面の道路は、地域の小学生や高校生の通学路でもあり、子ども達の大きな挨拶が聞こえてきます。

初めて足を運んだのは2017年6月。くまもとアートポリスが取り組む「みんなの家」の建設に伴う現地視察で、縁あって九州工業大学徳田研究室と福岡大学四ヶ所研究室は、室第二仮設団地「みんなの家」(設計者:徳田光弘、四ヶ所高志)の計画に加勢させていただくことになっていました。徐々に暮らしが仮設団地から恒久的な住まいへと移ろうとする中で、住民の方からも「早く建てて欲しい」との声がでた。早速、意見交換会の日取りを7月に決め、計画に取り掛かると同時に、室第二仮設団地でのKASEIもスタートしました。

現地視察から約1ヶ月。むかえた意見交換会では、冒頭、案の説明に加え学生からKASEIについての説明も行い、お集りいただいた住民の皆さんからたくさんの意見をいただきました。これまで熊本各地で行われてきた「みんなの家」をベースにしたKASEIの活動経験が、会での自分たちの振る舞いに加え、住民の方が「みんなの家」の使い方をイメージすることに大きく活かされたように思いました。建物がどんな形で、部屋がどれくらい大きいのかなどの建築的なイメージに加え、実際にその空間をどのように使うことができるのかが住民の方にとってはとても大事なことです。自分達がKASEIとして「できること」を示すことも、想像しづらいニーズを引き出すことにつながったのではないかと思います。

意見交換会后、早さが求められる中で、当初の想定から遅れてしまったものの2018年2月に着工。現地視察から意見交換会と、「みんなの家」の計画と並行して行われていく



現地視察



意見交換会



塗装WS



田上 健一 | Kenichi TANOUÉ
九州大学 教授 | Kyusyu University, Prof.



朝廣 和夫 | Kazuo ASAHIRO
九州大学 准教授 | Kyusyu University, Assoc. Prof.

[Column] 学生の声

昨年度は先輩の手伝い程度でKASEIの活動に参加してきたが、研究室の代表として仮設住宅の方と話をするうちに喜びや、要望を聞くことができ、今後も要望に沿うサポートを行っていきます。

九州大学 田上研 B4:有馬 駿

[Column] 学生の声

復興が進むにつれて、KASEIプロジェクトとしての役割も変化しつつあるのではないかと思います。これからまた一つ一つ、自分たちに出来ることを積み重ねていきたいと思っています。

福岡大学 四ヶ所研 M1:西野 雄太

室第二仮設団地での活動は、これまでに経験のあった「みんなの家」を使うきっかけとなる「ものづくり」や「ことづくり」に加え、外壁の塗装や外構の整備など、実際に建てるコトの中にもありました。

着工に遅れをとったこともあり、住民の方の心が離れていないかと心配でしたが、現場に足を運び作業する中で、住民の方から「お疲れ様」「楽しみにしている」と声をかけていただきました。建てる喜びを感じた瞬間でもあり、学生仕事ながらに責任を感じた瞬間でもありました。こういった経験は、学生にとって非常に貴重な経験です。

実際に外壁の塗装は、その色を決めるところからはじまり、経験のなさはとにかくやってみるといった具合に、様々な塗料を繰り返し杉材に塗る試行錯誤の連続で、外壁塗装がはじまってからは団地に足を運ぶたびに、どう見えているのかとドキドキしていたことを覚えています。

外壁の塗装も終わりに近づき、残すところは敷石による外構の整備ということで、今回、室第二仮設団地の施工を担当していただいた工務店の方や職人さんらが私たちKASEIに加勢してくださいました。当初は学生のみで挑むつもり作業も職人さんらの指導、補助により格段に質が向上。作業後は夕暮れの空に映える弁柄色の「みんなの家」を写真に収めながら談笑し、喜びを共有することができました。

そうして迎えた2018年3月20日。室第二仮設団地「みんなの家」は無事に検査、引き渡しを終えました。当日、住民の皆さんは、要望をまとめた紙を用意して待ってくださっていました。次は住みこなすコトへ、これからもKASEIとしての活動は続いています。



徳田 光弘 | Mitsuhiro TOKUDA
九州工業大学 准教授 |
Kyusyu Institute of Technology, Assoc. Prof.

[Column] 学生の声

住民の方々と一緒に無事にみんなの家を建設することができ、充実した活動ができたと思います。今後も団地の住民の方々や他のボランティア団体と関わっていききたいと思います。

九州工業大学 徳田研 M1:大久 美保



塗装WS



敷石WS



3月20日竣工



四ヶ所 高志 | Takashi SHIKASHO
福岡大学 助教 | Fukuoka University, Assist. Prof

九州大学田上研究室・野添 脩斗、田中 精耕、河合 恵美、磯上 千尋、福田 健、有馬 駿、中原 有理、山中 雄登、遠藤 智樹
福岡大学四ヶ所研究室・西野 雄太、原 昌平、井上 和音、鈴木 嗣巳、出口 貴太、永松 怜子、中元 翔一、姫野 勇輝、屋宜望、岩井 巧
九州工業大学徳田研究室・大久 美保、木嶋 耕平、西田 晴貴

御船町東小坂団地

Mifune-machi Higashi Ozaka

熊本大学 田中研

自力再建が進む東小坂仮設団地での取り組み

熊本地震発災から2年目の平成29年度、熊本大学田中研究室は、「御船町東小坂仮設団地（以下、東小坂団地）での意見交換会」と「学生常駐@コミュニティスペース（以下、CS）」、「他仮設団地の視察」の3つを主軸に活動した。

東小坂団地での意見交換会

平成29年度初めの活動は、4月15日におこなった東小坂団地での意見交換会であった。この意見交換会は、仮設住宅とCSの建設が終わり、被災住民の仮住まい供給にひと段落がついた時のことで、住民の今後の意向や悩みを把握するために企画した。まずはより幅広く多様な意向や悩みを伺うべく、具体的なお題は避け、『現在の住まいのこと』、『今後のこと（住まいやまち）』について住民と意見を交わした。前者では「自宅に住めているが大丈夫か知りたい」や「小坂の情報が欲しい」、後者では「身近な場所の情報入手方法の充実」や「CSでサロン事業をしたい」などの意見があった。情報不足による不安感からくる意見が多数あった一方で、これからの暮らしへの期待を抱く意見も見受けられ、不安感の解消と快適な住空間への支援が必要であることがわかった。

学生常駐@CS

意見交換会后、不安感の解消と快適な住空間への支援という難しい課題に対して、まずCSでの学生常駐を実施した。学生常駐は2週間に1度、土曜日の14～17時に設け、具体的にどのような情報を住民が必要としているのかを知ること、CSの利用促進を目的とした。学生常駐を始めてから、CSに住民が相談しに来る機会は少なかったものの、回数を重ね、住民との挨拶や世間話をする中で、他の仮設団地と比べて自立再建の意思が強い住民が多いことがわかった。また、週に2回の移動販売車が訪れる時にはCSが一時住民のくつろぎの場になっていることもわかり、快適な住空間



意見交換会の様子



住民を交えた意見発表の様子



学生常駐日の様子

[Column] 学生の声

昨年度までは（別大学所属で）テクノ団地での活動に関わっていましたが、今年度からは東小坂団地での活動を経験したことで、各地域ごとに抱えている問題は様々で、支援者それぞれに想像力が必要とされていることを感じました。

熊本大学 田中研 M1: 古賀 壮一郎

[Column] 学生の声

自力再建が積極的に進んでいた東小坂仮設団地では、特に状況が目まぐるしく変わり続けていました。支援が自力再建の妨げにならないような配慮も必要であり、各仮設団地に見合った支援の仕方があることを知りました。

熊本大学 田中研 M1: 藤田 智之

の姿を垣間見ることができた。

他仮設団地の視察

学生常駐期間と平行して他仮設団地の視察をおこなっていた。他団地の状況と比較することで東小坂団地の現状の把握に役立てたり、活動の参考になるような支援を模索することが視察の目的であった。視察では、九工大佐久間研や大阪工業大前田研の活動、白旗団地のイベントなどに参加。また、御船町の仮設団地には全てお邪魔し、その中で地域支え合いセンターとのつながりも得ることができた。支援していく身であるものの、多くの方々からの助けの中で様々な知見を得ることができたと感じる。そんな中でそれぞれの仮設団地は状況が違うこと、それに伴い支援のあり方が変わることを強く認識した。

九工大佐久間研が担当する飯野小仮設団地は、小学校に隣接し子供が多い仮設団地である。自治会長は精力的に学生と関わりながら、ほかの住民も巻き込みながら仮設団地の住環境を良くしようと尽力されていた。私たちは、みんなの家の縁側の延長の手伝いをしたが、その場は自治会長や住民からのアドバイスが飛び交う活発な場となっていた。そのような団地がある一方で、東小坂団地は、先述したように自力再建の意思が強く、再建速度も早い団地である。一致団結して復興していくというよりは、農業従事者が多いという理由とも相まって、各個人それぞれで復興していく様子が見られた。高齢の方が多い地域でもあるので困っている人がいれば力を貸すという土地柄。そういう地域だからこそ、私たちの支援のあり方は現在「困ったことがあればお手伝いをする」というものに落ち着いている。

このように団地ごとの特徴があり、それに見合った支援のあり方があることを学んだ年であった。震災から3年目を迎え、復興は進み、仮設住宅に空きが出てきている時期にすでに差し掛かっている。今後も、状況の変化に応じた支援のあり方を再考していきたいと思う。

熊本大学 田中研究室・藤田 智之、古賀 壮一郎、中村 太紀、吉永 優成、甲斐 悠加、吉海 雄大、ワナズルフィア、牛島 美夏、立花 和弥、武井 碩毅



学生常駐日の様子



他団地視察の様子



東小坂団地での記念撮影



田中 智之 | Tomoyuki TANAKA
熊本大学 准教授 | Kumamoto university, Assoc. Prof.



星野 裕司 | Yuji HOSHINO
熊本大学 准教授 | Kumamoto university, Assoc. Prof.

宇土市境目・高柳団地

Uto-shi Sakaimi, Takayanagi

鹿児島大学 柴田・増留研

宇土市では、KASEIの取り組みとして植木鉢カラーペイント計画を実施しました。行った場所は、境目仮設団地、浦田仮設団地の2つの団地です。今年度は、団地を明るくするために、人々のコミュニティを形成していくことが大切だという意見が研究室内で出ていました。その中で、「楽しい!」という心の余裕を生むことでコミュニティの形成が行いやすくなるを考え、WSの形を全員で模索してきました。「モノ」ではなく「コト」作りを行うという今年度のKASEIの目標から思案し、この計画が生まれました。団地を明るくしようという鹿児島グループの共通意識から、色彩を使ったWSです。色彩には人の心を癒す効果があるとされ、子どもだけでなく、大人の方々も楽しくWSに取り組むことができ、創造力も養うことができたと感じています。作業内容としては、植木鉢の代用品とした塩ビ管にカラーペイントを行い、その塩ビ管の中に、土や軽石を入れ、植栽を行いました。1度目のWSはKASEI側の参加人数が多く、住民の人々が馴染みづらいのではないかと反省から2度目のWSでは10人以下の少人数で参加し、暑さも考慮しながら室内で活動を行いました。子どもからお年寄りまで多くの住民の方々に参加していただき、とても楽しいWSを行うことができました。WSを行いながら住民の方から「植木鉢が集まるととてもかわいね〜」「暑かけど、楽しかった〜」と嬉しいお言葉をいただき、むしろ私たちが、勇気や元気をいただいた様に感じ、熊本の強さを感じました。このWSを行い、住民の方と感情を”共有”することの大切さを学びました。これからも様々な形でお互いを助け合っていきたいと感じました。



WSの様子



WS後の集合写真



休憩中の様子



柴田 晃宏 | Akihiro SHIBATA
鹿児島大学 准教授 |
Kagoshima University, Assoc. Prof.



増留 麻紀子 | Makiko MASUDOME
鹿児島大学 助教 |
Kagoshima University, Assist. Prof.

[Column] 学生の声

活動を行う中で、被災された人々を元気づけるつもりが私たちまで元気をいただけていました。多くの人々と繋がり合う大切さを本当に実感できました。これからも少しでも成長しながら加勢していきたいと思っています。

鹿児島大学大学院 柴田研究室 M2: 明治 強照

[Column] 学生の声

昨年度に引き続きこの活動に参加させていただきました。住人の方々も団地での生活に慣れて来ている反面、改善できることはたくさんあるように感じました。今後少しでも環境改善の力になればと思います。

鹿児島大学大学院 増留研究室 M2: 松田 寛敬

宇城市御領・曲野長谷川・当尾団地

Uki-shi Goryou, Maganohasegawa, Tounoo

鹿児島大学 鷹野研
福山市立大学
第一工業大学

宇城市御領仮設団地と曲野長谷川団地は、9月に「みんなの家」が竣工しました。KASEI鹿児島チームでは、設計のお手伝いや建設作業にも携わり、思い入れのある「みんなの家」となりました。

8月23日、御領仮設団地の「みんなの家」の縁側の床張り作業を行いました。御領仮設団地の「みんなの家」は、建物全面に縁側が広がっているところが特徴で、その建物の特徴となる縁側の建設のお手伝いをする事ができ、大変貴重な経験をさせていただきました。無垢の木材を使用したため、わずかな変形があり、微調整を行いながら床を貼っていく作業は難しかったですが、建設業者の方にアドバイスを頂きながら完成することができました。

11月8日には竣工した御領仮設団地の「みんなの家」でお茶会を開催しました。このお茶会が、御領仮設団地のみんなの家での初めての集まりでした。平日の昼間ということもあり、人数は少なかったですが、区長さんや団地以外の方も参加してくださいました。お茶会ではみんなの家について、「せっかくだからいいものをつくっていただいたから、もっとたくさんの人に利用してもらいたい」というありがたい意見をいただきました。

2月17日には、御領団地と曲野長谷川団地の両団地で、組手什を使った家具づくりワークショップを開催しました。ワークショップは1世帯に学生1人がつき、設計から組み立てまでを一緒に行いました。住民の方々から「いいものができて良かった」「これから大切に使うね」と言っていただき、私達も嬉しかったです。

震災から2年経ち、仮設住宅の居住者は減っていますが、変化していく環境の中でも私たちにできることを考えながら、支援を続けていきたいと考えています。



鷹野 敦 | Atsushi TAKANO
鹿児島大学 准教授 |
Kagoshima University, Assoc. Prof.

[Column] 学生の声

組手什による家具製作のワークショップを数回実施し、他の地区の人を含め多くの人と交流することができ、また現地の状況を初めて知りました。今年度も新たなワークショップを通してKASEIの活動に協力して行きたいです。

鹿児島大学 鷹野研究室 B4: 徳田 優志



2月17日WS後の集合写真



8月23日「みんなの家」縁側床張り



11月8日お茶会の様子



根本 修平 | Shuhei NEMOTO
福山市立大学 講師 |
Fukuyama City University, Lecturer

鹿児島大学 鷹野研究室・林田 真知、島 俊典、平川 美憂、加藤 佳輝、田村 健太郎、赤松 麻由、吉原 佳代、稲留 壮親、大脇 友里加、柴田 隆詠、田畑 貴士、徳田 優志、安長 瑠人
第一工業大学・河野 宏文、麻生 大雅、金枝 秀憲
福山市立大学・内海 果奈、新家 健太、舟木 花織、笠松 千春、坂 篤紀

熊本市城南町さんさん2丁目団地

Kumamoto-shi Jonan-machi sansan 2chome

九州産業大学 矢作研

6月16日、熊本市城南町さんさん2丁目仮設団地と隣接する公園との間のスロープに設置する手摺について意見交換会を「プッシュ型みんなの家」としてつくられたみんなの家で行いました。九州産業大学の学生で手摺の提案から交流会として素麺流しのイベント企画まで行いました。前回の訪問から時間が経ってしまった為、住民の方の参加があるか不安でしたが、熊本市やさんさん2丁目相談員の方のご協力で多くの方に参加していただき意見を聞くことが出来ました。

今回、九州産業大学では初めて使用する組手什を用いて素麺流し台を製作しました。どのように組み立てれば倒れずに安定させることができるのか、その場でも考えながら1つ1つ作り上げていきました。完成するとしっかりと組手什だけで組まれた素麺流し台が出来上がり学生はもちろん、住民の方も喜んでくださいました。

当日は手摺について住民の方と意見を交わす担当と素麺流しの準備をする担当にわかれ、並行して作業を進めました。意見交換会では設置予定場所の図面と段ボールで作った1/1模型を見ながら話し合いを進め、設置位置の提案や高さ等の要望を聞くことができ、その中で住民同士が気になっていることや困っていることも少しづつ知ることが出来ました。意見交換会後に開催したイベントでは、仮設住宅の方とすでに退居された方と地域住民の方に参加していただくことが出来ました。隣接する公園から子供たちが参加してくれたことでとても賑やかな時間になり、住民の方からは感謝のお言葉もいただきました。

今後のさんさん2丁目での活動としては、今回の意見や経験から実際に手摺の設置をおこなったり組手什を用いた収納の製作などをしながら住民の方々と交流していこうと考えています。



学生による看板の設置



完成式の様子



お茶会の様子

[Column] 学生の声

活動を企画した際には、地域のたくさんの住民の方々が参加していただき私たちも楽しませていただいています。これからの活動予定も増えているので継続して関わっていきたいと思っています。

九州産業大学 矢作研B3:小澤成美

[Column] 学生の声

何か少しでも加勢したいと始めたKASEI活動のなかで、他大学の学生や住民の方々にたくさんの活力を与えて貰いました。活力の恩返しが出来ると自分たちの活動を継続していく事の大切さを感じています。

九州産業大学 矢作研B2:田所佑哉

阿蘇市内牧団地

Aso-shi Uchinomaki

九州産業大学 矢作研

9月22日、熊本県阿蘇市内牧仮設団地に建てられた「プッシュ型みんなの家」の鍵引き渡し式を行いました。rhythmdesignの方々とチームを組んでKASEI活動として設計に参加させて頂いたこのみんなの家は3月から住民の方と意見交換会を行いました。意見交換会では部屋の配置や広さや畳の間があってほしいという声があり、私たちは住民の方々に長く愛されるようなみんなの家を考えました。「プッシュ型みんなの家」は仮設団地がなくなった後も常設として後世に残り続けるので地元の方々が今後も利用できるようにという思いがあったからです。

鍵の引き渡し式では想像より多くの住民の方や報道の方が参加してくださり、団地の方々が笑顔で喜んでくださったことが嬉しかったです。引き渡し式の後は無事に完成したみんなの家に入り、意見交換会から変わった箇所や過ごし方のことを話しながら住民の方と交流を深めました。内牧仮設団地には豊かな自然環境があり、そこに建ったこのみんなの家は木々を抜ける風や水の音も楽しむことができ地元の方々の集まる場所になるのではないかと思います。

今回の活動で私たちは設計に携わることができ、住民の方々の笑顔が見れたことで、今後よりKASEIとして何が出来るかということを検討しながら活動をしていきたいとおもいました。

また、こうした大きな取り組みがあることで次に利用する人はプランターに花を植えたり、緑のカーテンを設置したりそのためのワークショップを開催したりと様々な活動をしていくことができます。私たちはそのような活動が増え住民の方々とより交流できるよう活動して行きたいと思っています。



矢作 昌生 | Masao YAHAGI
九州産業大学 教授 |
Kyusyu Sangyo University, Prof.

[Column] 学生の声

先輩方が住民の方々に長く愛されるようにと計画されているので、今後みんなの家でいろいろな活動を提案し、住民の方々と共に続けていきたいと思っています。

九州産業大学 矢作研B4:松石 和也



鍵引き渡し式の様子



設計メンバーがみんなの家を眺める様子



住民の方々と完成したみんなの家で交流をしている様子



井手 健一郎 | Kenichiro IDE
リズムデザイン | rhythmdesign

九州産業大学 矢作研究室・小澤 成美、近藤 るい、田所 佑哉、森田 滉己、山本 彩葉、松石 和也、井本 大智、濱津 のぞみ、松田 湖都美、吉永 広野

益城町小池島田団地

Mashiki-machi Oikeshimada

崇城大学 西郷研・秋元研

益城町小池島田仮設団地の2017年度の活動として、グリーンカーテンの設置、傘立てや裁縫テーブルの制作、将棋対局会の開催など、ものづくりや催しを行ってきました。住民の方々が必要とされるものをリサーチした上で、複数回打合せを行い、皆さんの希望に沿って機能やデザインの提案をしました。

打合せでは、サンプルを作ることで、大きさや機能を自治会長さんに確認していただき、その都度、要望や形の変更を聞くことができました。また、必要とされる数や制作実施日など一つ一つを話し合い、共に作り上げていくことで、住民の方々の信頼関係が築き上げられていくことを実感できました。

梅雨対策のための傘立ての制作や、住居内の収納スペースの問題改善のために物が掛けられる長押を設置しました。また、島田地区の女性たちで結成された「サークル絆」の方々の裁縫テーブルは、仮設住宅内で使われるため収納スペースを多く確保したこと、ポーチなどを作成するため布を傷つけないように丁寧に角を取っていくことなど様々な必要とされるものを工夫するにあたり、それが住民の方々にどう支えてくれるのかを考え、形にすることができました。

ものづくりの際には、最近会ったことや悩みごとなど住民の方々とたくさん話げができました。和気藹々とした雰囲気の中で作業することで、ただ便利なものを作っていくのではなく、この制作活動が住民の方々にとってよいひと時となるように工夫してきました。

作業後、実際にお宅の中を拝見し設置させていただくなど、住民の方々が私達を信頼してくださっていることが伝わってきたため、今後も皆さんの生活を支えてくれるものやことを提案し、心の支えとなる取り組みをしていきたいと思いました。



長押の設置作業



裁縫テーブル打合せ



裁縫テーブル作業

崇城大学 西郷研究室・谷本 優希、中津 美穂、古田 佑季、野嶋 柊子、二階堂 匡佑、福田 智大、森下 鉄平、坂井 郁途
崇城大学 秋元研究室・池田 清華、宮崎 航大、中村 公俊、中山 毅男、松尾 伸

崇城大学 西郷研 B4: 赤尾 光彦

[Column] 学生の声

便利なものだけでなく皆さんで同じものをつくることこそ、物理的にも精神的にも支えてくれるものとことの提案になることを実感し、私たちの活動が少しでも住民の方々の役に立つことを切に願った一年でした。

嘉島町

Kashima-machi

崇城大学 秋元研
近畿大学 益田研

私たちは嘉島町の特定の団地を担当しているのではなく、仮設住宅の窓口になっている町の農政課や地域支え合いセンターとの情報交換をもとに、支援活動を行っています。

一昨年に上仲間団地で靴箱と門松・正月飾りをつくったところ、町を通じて、新たに傘立ての製作を行うことになりました。今回は組手仕によるもので、初めて行うことになりました。9月の下仲間団地では、県の指導のもとに製作し、無事設置することができました。この時は町の方々の参加もあり、組手仕の認知の場ともなりました。その結果かどうかはわかりませんが、10月にさらに4団地から要望があがりました。まずは、各団地にて住民の方々から設置位置や大きさの要望を聞き、簡単な図面を作成しました。次に、近隣公園団地にてすべての傘立ての製作を行い、その後それぞれの団地に設置しました。

年末には、門松・正月飾りづくりを、上仲間団地に加えて、下仲間団地でも行うことになり、大学でそれぞれ分担しました。門松づくりは、上仲間では昨年の経験者も多くスムーズでしたが、下仲間は参加者が少ない上、初めてということで多少苦戦しました。正月飾りづくりは、主に女性の方々が学生と話しながら和気あいあいと全世帯分を製作・配布し、これで新たな年を迎えられたことと思います。

嘉島町の仮設団地の多くは集落内の公園に建設されています。住戸数は20に満たないものが多く、みんなの家が建設されたのは3つのみですが、公民館などの集会施設が隣接していることもあります。門松づくりでは、飾りとなる木々が足りないとなると、いつの間にか用意されていたり、仮設団地に入居していない集落の方がイベントに参加したり、仮設団地と集落との近さを感じました。



組手仕による傘立てづくり(近隣公園団地)



正月飾りづくり(下仲間団地)



門松づくり(上仲間団地)



西郷正浩 | Masahiro SAIGO
崇城大学 教授 | Sojo University, Prof.



益田 信也 | Shinya MASUDA
近畿大学 准教授 | Kinki University, Assoc. Prof.



秋元 一秀 | Kazuhide AKIMOTO
崇城大学 教授 | Sojo University, Prof.

崇城大学 秋元研究室・安達 大樹、一鬼 正浩、笠井 雄登、下川 祥平、鶴 えりな、池田 清華、中村 公俊、中山 毅男
近畿大学 益田研究室・守田 駿、藤原 文武、野坂 響、大棚 紀輝、真弓 静七、樋口 葵、福田 菜々子

美の里町くすのき平団地

Misato-machi Kusunoki-daira

大阪工業大学 前田研

私たちは、2017年5月中旬から始まった建設のプロセスにおいて、美里町の工務店であり、ご自身も被災された五瀬建設の五瀬さんや、現場監督の橋本さん（現場の大工さんは橋本さんのお兄さん）の協力のもと、上棟時に「餅まき」、竣工時に「たこ焼きパーティ」をしました。

上棟式の際には、住民の中でも「餅まき」のような祝い事をするべきか、逡巡する声もありましたが、五瀬さんが地元の声として、こういう子供も一緒になって楽しめるイベントはすべきだとおっしゃって頂き実現した。当日は五瀬さんの小学生のお嬢さんやその友達も集まってもらい、ほんの一日の出来事ですが、行ってよかったです。

西・東砥用両地区から集まってきている十数世帯の仮設住宅の方々は、一人顔見知りがいればい程度のお知り合いでした。そして、入居初期段階では、このようなイベントによって顔見知りになっていくのだとも感じました。「餅まき」の最後には、竣工時には大阪から大阪工業大学の学生がたこ焼き樹を持参するので、皆でウッドデッキの塗装をして、そのあとたこ焼きパーティをしようという約束をして帰りました。

竣工はまだ残暑の残る暑い日でしたが、住民の方にも大工さんや、DIYが得意な方もいらっしゃったので、学生と一緒に汗だくになりながら、デッキ塗装ワークショップが無事完了しました。大阪工大の学生達からは本場のたこ焼きを振る舞い、地元の方からはさっぱりした漬物や家庭料理を振舞って頂いた。気負い過ぎず、出来ることをお手伝いするというスタンスが、お互いにとってよい関係となり、その関係の延長に、住民の皆さん同士のコミュニティが徐々に育まれていくひとつの種をつくるのが出来ていれば嬉しいことだなあと、運動のあとの美味しいビールを頂きながら考えていました。



上棟式の餅まき



デッキ塗装ワークショップ



たこ焼きパーティ



前田 茂樹 | Shigeki MAEDA
大阪工業大学 准教授 |
Osaka Institute of Technology, Assoc. Prof.

大阪工業大学前田研・東野 健太、阿部 彩音、島野 美樹、埜田 太一、萩原 克典、林 雅大、新井 悠太、隈元 峻太、宇田 政仁、南石 敦史、帆足 勇輝、片岡 一智、岩村 莉奈、藪 南美、渡邊 葵衣

[Column] 学生の声

みんなの家の施工に参加して、自分の手で建築ができていく感覚を味わえてとても楽しかったです。現地の方々とたわいもない会話を繰り返す中で、授業だけでは気付けない建築の着眼点を見つけることができました。

大阪工業大学前田研B2: 藪 南美

御船町玉虫・甘木団地

Mifune-machi Tamamushi, Amagi

大阪市立大学 宮本研・横山研

2017年度は、階段や擁壁制作、左官、塗装など、計3回のワークショップを学生中心に行い、甘木団地・玉虫団地のみんなの家を竣工させることができました。

6月4～10日、甘木団地で道路とみんなの家のレベル差を解消し、お寺の参道の軸線を受けるため、瓦階段・基礎石擁壁制作ワークショップを行いました。被災した民家の瓦や基礎石を再利用することで、住民の方々の記憶を継承できるように設計しました。住民の方々をはじめ、九州大学や有明高専、熊本高専にも協力していただき、計460枚の瓦をこぼ立てた階段と、基礎石を積み上げた擁壁が完成しました。

6月28日～7月4日、両団地で左官ワークショップを行いました。都倉達也さんをはじめとする左官職人の指導のもと、甘木団地は朱色の漆喰の磨き壁、玉虫団地は藍色の掻き落としに仕上げました。想像以上の作業量と難しさがありましたが、美しく仕上がった左官塗り壁が団地のシンボルとなりました。より住民の方々に親しまれるみんなの家にすることができました。

8月29～30日、オスモ&エーデル株式会社から塗料を提供していただき、両団地で塗装ワークショップを行いました。当初に比べ、KASEI活動もかなり認知され、住民の方々からみんなの家の感想や仮設団地での生活について知ることができました。また、両団地の壁の色を用いたロゴマークとみんなの家のトリセツをお渡ししました。

9月18日、甘木団地で竣工パーティを行いました。みんなの家の大きな軒下と広い縁側に集まり、住民の方々と竣工を祝う楽しい会となり、KASEI活動の成果を実感することができました。また、その様子を朝日新聞で取り上げて頂きました。今後も両団地ともに住民の方々に愛されるみんなの家となるよう、活動を続けていきたいと思っています。



宮本 佳明 | Katsuhiko MIYAMOTO
大阪市立大学 教授 | Osaka City University, Prof.

[Column] 学生の声

昨年度は甘木団地・玉虫団地ともにみんなの家が竣工し、また様々なワークショップを行うことができました。2年間のKASEI活動を通じて学んだこと、体験したことを今後の活動にも生かしていきたいと思っています。

大阪市立大学大学院 M1: 重光 理沙



左官ワークショップ



みんなの家



竣工パーティ



横山 俊祐 | Shunsuke YOKOYAMA
大阪市立大学 教授 | Osaka City University, Prof.

建築デザイン研究室・川口 昂史、重光 理沙、中嶋 純一、菟口 祐美子、中林 顕斗、宮城 太一

建築計画研究室・土居 和樹、富永 慧、海本 芳希、中野 隆太

[Column] 学生の声

くすのき平みんなの家でのWSと使われ方の調査を通じてコミュニティ形成の難しさと運営形態の重要性を学ばせてもらいました。私たちの小さな加勢をきっかけに、みんなの家が地域の拠り所となることを願っています。

大阪工業大学前田研 M2: 東野 健太

九州北部豪雨現状

Present situation of heavy rainfall in Northern Kyushu

野口 雄太 Yuta NOGUCHI

九州大学大学院 人間環境学府 都市共生デザイン専攻 博士後期課程

平成29年7月5日、熊本地震からようやく1年が経過した九州地方を今度は水害が襲った。この平成29年7月九州北部豪雨は、5日払暁に鳥根県へ大雨を降らせた梅雨前線が更に南下、同日午後には筑後地域上空に至ると線状降水帯を形成し、長時間に渡って局地的な大雨を降らせた。これにより、山間部を流れる筑後川支流の水位は上昇し、かつ土砂崩れに伴って河川へ流れ込んだ木々が川の流れを堰き止めて各地で氾濫を招き、被害を拡大することとなった。また、土石流や流木は住宅地にも押し寄せ、直接的に家屋を破壊するものもあった。特に被害の集中した福岡県朝倉市・東峰村、大分県日田市で、40余りの人命が奪われ、全壊336棟、半壊1,096棟、一部損壊44棟、床上浸水180棟、床下浸水1,481棟の家屋が被災した*1。この地域では、5年前に阿蘇山麓から筑後川南岸にかけての地域を襲った平成24年7月九州北部豪雨もまだ記憶に新しく、H29豪雨から1年が経った本稿執筆時、より広域に西日本をあまねく襲った平成30年7月豪雨も発生している*2。

これを受け福岡県では、災害救助法に基づく建設型応急仮設住宅が朝倉市に3団地78戸、東峰村に1団地22戸建設された。これらの仮設住宅には木造が採用され、戸数の少ない朝倉市宮野地区の仮設団地を除く3団地には木造の集会施設も設置されている。木造仮設は、H24豪雨を契機として県下の建設業3団体と県で設置した福岡県建築物災害対策協議会がプレハブ仮設を元に研究を進めていた設計案に基づいて建設されると同時に、前年に熊本で実現したバリアフリー型木造仮設も必要数が建設されている。また、木造集会施設についても、熊本で規格型みんなの家を設計した末廣香織(九州大学)が設計協力を担うこととなり、熊本のみんなの家での知見が生かされた設計となった。

このように、熊本地震から継続した取り組みが果たされるなか、KASEIも新たに福岡県から活動助成を受け、朝倉市・東峰村の仮設団地においても活動を展開することとなった。KASEIは、熊本で培った支援の方法論と被災地への寄り添い方を、熊本支援と並行して継続していきたいと考えている。



川が土地を削り取ると同時に土砂崩れも発生している(宝珠山地区)



建設された木造仮設住宅(朝倉市林田仮設団地)



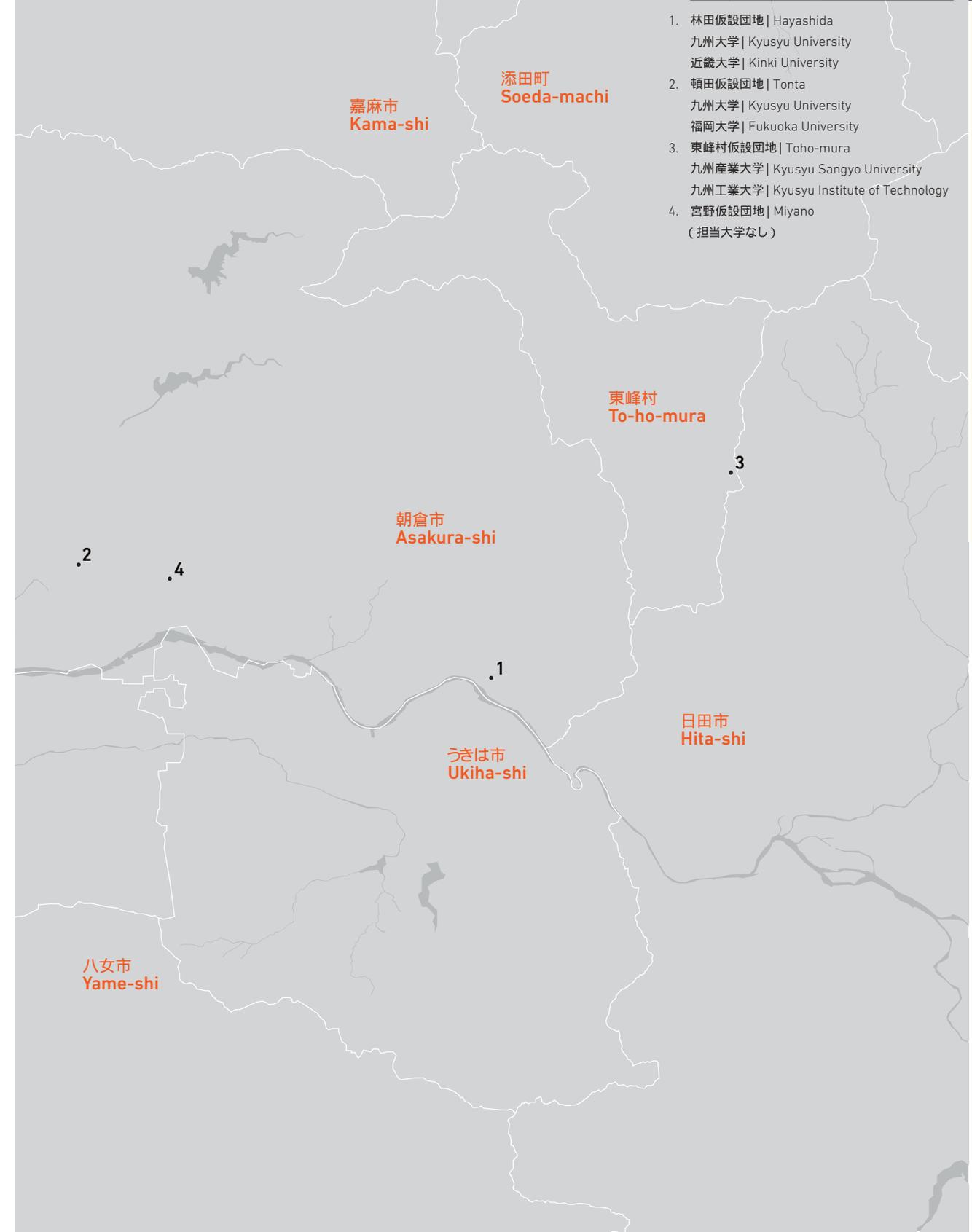
熊本のみんなの家を踏まえて設計された集会所(同仮設)

*1 消防庁：平成29年6月30日からの梅雨前線に伴う大雨及び台風第3号の被害状況及び消防機関等の対応状況について(第76報)平成30年6月1日発表

*2 この地域は歴史的に見ても梅雨前線を原因とする集中豪雨による水害が多発しており、1953年に発生した昭和28年西日本水害では、筑後川・白川を始めとする北部九州の河川という河川がほぼ全て氾濫、流域に甚大な被害をもたらしている。

KASEI 活動マップ(九州北部豪雨)

KASEI activity map



1. 林田仮設団地 | Hayashida
九州大学 | Kyusyu University
近畿大学 | Kinki University
2. 頓田仮設団地 | Tonta
九州大学 | Kyusyu University
福岡大学 | Fukuoka University
3. 東峰村仮設団地 | Toho-mura
九州産業大学 | Kyusyu Sangyo University
九州工業大学 | Kyusyu Institute of Technology
4. 宮野仮設団地 | Miyano
(担当大学なし)

朝倉市林田団地

Asakura-shi Hayashida

九州大学 末廣研・菊地研

林田仮設団地は全部で51戸あり、すべて木造です。そこに設計したのは、片側ガラス張り、アイランドキッチンが特徴の集会所です。

9月末に集会所の完成パーティーを行いました。研究室で集会所の設計に携わらせていただいたので、その集会所の完成に合わせて、みんなで夕食を食べる会を企画しました。これを機会に、何もなかったキッチンに包丁やまな板、ボールなどのキッチン用品が揃い、使いやすくなったのではないかと思います。また、集会所をどのように使えば良いのか、熊本の子どもの家の使われ方を紙にまとめ、「使い方いろいろ」を作りました。集会所の使い方や生活で困っていることを共有出来るいい機会になったのではないかと思います。

12月末には、グリーンコープさんが企画した餅つきにお手伝いとして参加しました。グリーンコープさんの他、他大学のボランティアサークル、サーカス団も来て賑やかな餅つきになり、住民の方も楽しんでいる様子でした。

3月末には、高校生が作ってくれたベンチに合わせた屋外用のテーブルが欲しいという要望を元に、折りたたみ式のテーブルを作りました。やはり作っていると住民の方が声をかけてくださるので、現地で作ることはコミュニケーションをとることにつながり、大事なことだと改めて感じました。

朝倉ではグリーンコープさんをはじめ、様々なボランティアの方が集まり、毎週末集会所はイベントが開かれているなど賑やかな様子です。ボランティアが住民の方の負担にならないようしっかりと配慮をしつつ、サポートしていきたいと思えます。熊本地震をきっかけに発足したKASEIですが、九州北部豪雨のような他の災害復興にもボランティアとして携わるといったように、活動をつなげていくことができたらと思えます。

[Column] 学生の声

食事会では、地域の女性や親子の方々と星の数ほどの餃子と一緒に包みながらおしゃべりに興じました。折畳みテーブルは、団地のベテランの方の助言もあり何とか完成し、後日使っていただけただけでほっとしました。

九州大学 菊地研 M1:片岡 美佳



完成式パーティー



餅つき大会



折りたたみテーブル作成

九州大学 末廣研究室

遠藤 由貴、谷口 和弘、鶴田 敬祐、Ester Peralta、河村 悠希、大谷 芽生

九州大学 菊地研究室

野口 雄太、前川 遥奈、丸山 千尋、藪井 翔太郎、片岡 美佳、沼口 悠太、

春山 詩菜 (黒瀬研究室)



3年目のKASEI

田上 健一 Kenichi TANOUÉ

九州大学 芸術工学研究院 環境デザイン部門 構築環境デザイン 教授



南阿蘇村長野地区で自主的に開設された「みんなの家」



宇土市新松原みんなの家ワークショップ



宇土市新松原みんなの家完成式

少しずつ、段階的に

KASEIの活動も3年目となりました。

約20の大学、30以上の建築系研究室に所属する、総数約300名という多くの大学生・大学院生がゆるやかなネットワークの中で活動を展開しています。「建築系」という枠組みにもとらわれず、被災者や被災地域とともに歩みながら、自発的で心地よい環境構築のサポートを、少しずつ、継続的にそして段階的に実践しています。

補助線

震災直後は猛烈な数のボランティア団体が、スケジュールを奪い合うように活動していましたが、最近、みんなの家に掲示されている予定表にも空欄が目立ちます。

それぞれの研究室の活動も、応急仮設住宅団地へ入居当初時の家具づくり・植栽づくり等の団地内の「直接的」な環境改善活動から、みんなの家の計画に関わるワークショップ・竣工式等のイベントサポートや、住民組織の再構築や地域の再生、あらたな地域計画への関わりなど、より「包括的」な活動に移行しています。

わたしたちの南阿蘇村での活動でも、最初の1年間は、ゴーヤカーテンの設置、組手什製作、意見箱の設置、みんなの家計画ワークショップ、完成式のサポート等の直接的行動が中心でした。2年目に入ると、夏祭りのサポートから既存公民館での様々な自治活動などへの参画を経て、地震後に復活した神楽への参加や、住民の方々の要望を広く伺いながら関連する団体や自治体へと繋ぐ、といったより関係性の構築へと発展しています。

南阿蘇村の被災集落では、自宅が被災し仕事場も被災する二重被災、土砂災害警戒区域や指定中山間地域による宅地制限による住宅再建土地の所得困難性、隣接自治体内にある仮設住宅団地への移住、複数居住や居住地間移動など、二重、三重、四重の制約・制限により、生活や地域の再建への具体的な見通しを立てにくい状況です。

定期的な訪問の最中、仮設住宅団地での住民の方々との何気ない会話の中からも、漠然とした近い将来への不安を感じ取ることもあり、より自律的な地域としての再生は容易でないことがわかります。わたしたちへの要望や相談も、仮設住宅団地に関する以外のことが、以前より増えています。仮に、仮設住宅団地内を身近な生活の「一次圏」とすると、

被災した自宅を含んだ集落単位の「二次圏」、さらに近隣自治体も含めた「三次圏」と、その相談の空間的対象範囲も広がっています。仮設住宅団地退去後、そして中長期的な視点での地域の将来へのビジョンが必要であることがわかります。

このように、仮設住宅団地の敷地内で完結するものでなく、自らが動き、融通が利き、活動の多様性こそがKASEIの特徴といえるでしょう。設計図を描くときに「補助線」を描くように、KASEIは仮設住宅団地の生活から退去後の生活へと繋がっていく未来を描くための、補助線としての役割を担っているように思います。

また、活動当初はいわゆる「調査被害」を回避するために、ヒヤリングやアンケートの重複の自粛や、活動内容の共有化について申し合わせを行ってきました。しかし、震災1年経過した頃(KASEI活動2年目)からKASEIとしての調査も実施されるようになり、全戸アンケート調査、全住宅地の空間的調査等に取り組んでいます。これらの調査データと分析結果は、今後の他地域での災害復旧・復興に役立つ「補助線」として参照されるでしょう。

応急仮設住宅と社会住宅との近似性

長らくアジア地域のインフォーマル居住地や、社会住宅の調査・研究、そして計画に携わっています。

例えばフィリピンのマニラでは、いわゆるスラムと呼ばれる不法定住者の住宅には、平均して1戸(10.9~12.5m²)あたり2.1家族(8.5人)が居住しています。1人あたりの居住面積は僅か1.2~1.5m²です。

超狭小住宅に複数の家族がひしめき合って生活しており、衛生的な環境も劣悪です。その半数以上の居住地は、周期的に到来する台風に伴い発生する洪水被害を受ける河川沿いや、土砂災害等の被害を受けやすい危険地域にあります。低所得者であるが故の被災者でもあり、団塊的な社会的弱者といえます。命の危険に晒される上に生活向上が図れない負の連鎖の中にあるのです。

このような状況の中で、これまでのトップダウン型(土地収用・郊外化・分配形式の単純化など)とは異なる、不法定住者と呼ばれる住民を包摂した、参加型社会住宅地計画に取り組んでいます。

文化的・経済的な背景は全く異なりますが、現代の応急

仮設住宅とこの社会住宅はよく似ています。

どこが似ているのか？

それは、「環境を改善していくネイバーフッドづくり」、「身近なスケールのインフォーマリティ」、そして「参加の先にある未来社会のデザイン」というように、さまざまなスケールの「計画されていない」環境に働きかけを行いながら自らの空間を獲得していくことであり、そこに求められる課題とプロセスが共通しているのです。

もちろん、課題や限界はあります。例えば、参加の取り組みについても、仮設団地内でのワークショップの参加者にはある種の偏りがあるので、そこが代表できるのかという議論があり、ワークショップが形式的なものに陥ってしまうという問題があります。ですが、住民の方々と多くの外部のサポーターが熱意と喜びをもって集うワークショップやイベントには、被災地であるという緊張感を弛緩し、さらには単純な手段で今ある日常風景を変える力、思いがけない環境や未来をつくり出す力があります。

熊本地震から2年が経過し、小さくそして脆く見えた風景が随分と蘇ってきたように思います。KASEIの活動も、初動期の部分的支援から、新たな段階に入ったといえるでしょう。

学生主体のKASEI活動に期待すること

矢作 昌生 Masao YAHAGI

九州産業大学 建築都市工学部 建築学科 教授



小さな積み木の家<集会所>、岩手県陸前高田市



熊本市城南町さんさん2丁目仮設団地プッシュ型みんなの家



阿蘇市内牧仮設団地プッシュ型みんなの家



学生と住民の方々で行った流しそうめん

いつでもどこでも起こりうる自然災害

自然災害はある日突然、人の命を奪ったり、それまでの生活や営みを一瞬にして壊してしまう非常に悲惨な出来事である。近年、そのような自然災害は「百年に一度」「数十年に一度」「想定外」という言葉が添えられ、非常に頻繁に全国的に発生している。むしろ、全国どの街がいつ被災地となっても不思議ではない状況と言えるかも知れない。自然災害が繰り返し発生するたび、人々の防災意識は高まり、官民共に支援活動の方法も改善が行われてきたが、被災地の方々の生活を見ていると、現在でもそれが十分というレベルには遠いように感じる。災害発生から、ハードとしては、避難所→応急仮設住宅→みんなの家の設置→復興公営住宅、ソフトとしては、救援物資、義援金、支援活動、ボランティア活動等という流れが確立し、災害救助法などの法律も更新され、次の災害時に活かされていることは間違いないのだが、何が足りないのであろうか。

岩手県陸前高田市での経験

話しは少しさかのぼる。2011年3月11日、その日は福岡から東京へ出張の予定であったが、地震のため飛行機が欠航となり空港から事務所へ引き返した。東京で育った小生にとって、地震は身近な存在であり、差程気にも留めずに仕事を続けていたが、現実のものとは思えない映像を目の当たりにして愕然とした。翌日は仕事が手につかず、依頼もないのに、間伐材を利用した積み木のような工法でセルフビルドが可能な仮設住宅のプランを考え、当時、非常勤講師としてお世話になっていた九州工業大学の徳田光弘先生に相談をして、1ヶ月後には東北の被災地で何度かプレゼンテーションをさせて頂いたが、残念ながら実現には至らなかった。思いだけで行動し、何の役にも立たなかった苦い経験である。しかしながら、その活動をきっかけに陸前高田市今泉地区の住民の方々から声が掛かり「小さな積み木の家（新建築2011年12月号掲載）」という集会所が実現した。約400個の積み木の断面に住民の方々にメッセージを書いて頂き、復興までのタイムカプセルとして計画し、地区住民、学生や社会人ボランティアの方々と一緒に建築した。その後も学生と一緒に現地を何度も訪れ、復興住宅の建築などのサポートをさせて頂き、今年の夏、残念ながら復興ではなく、高台移転という理由で「小さな積み木の家」の解体作業を

一緒に行った。ここで学んだことは、建築(モノ)はきっかけであり、コトを通して、ヒトとの関わりが生まれ、支援をしたというより、逆に生きる力と勇気を見せて頂いたことである。極端な例ではあるが、設計事務所への内定を断り、「生きる力」を身につけるため農業の道へ進んだ学生もいたほどである。

学生主体のKASEI活動の意義について

KASEI活動の一番の特徴は学生が主体であるということである。我々教員も勿論活動に参加しているが、仮設住宅地には高齢者も多く、孫や子供の世代の若者と触れ合うだけで雰囲気は和らぐ。普段高齢者との関わりが少ない学生も、歳を取ると何が不自由と感ずるのか、住民の方々が何を望んでいるのか、様々なことを感じ取る。KASEIの主たる活動は、仮設住宅地の環境改善の支援であるが、実際は花壇や緑のカーテン、ウッドデッキや家具製作などのモノづくりを通して、コトを起し、ヒトとの繋がりを深めることである。普段建築デザインに意欲的に取り組んでいる学生にとって、「デザイン」というところまで至っていない活動と感ずるかも知れないが、建築の存在意義が「モノ・コト・ヒト」であることに気づくのに、とても有意義な機会となっている。そのような視点で見ると、一方向的に支援を行っているというより、学生にとっても体験を通じた貴重な「学びの場」となっている。

プッシュ型みんなの家の設計を通して

「プッシュ型みんなの家」とは、災害救助法で定める法律で設置対象外となっている小規模仮設団地の集会所である。熊本地震では規格型と本格型の「みんなの家」の整備が終わった後、2年目に日本財団の支援により建築された。設計については、KASEI活動に参加している大学教員や建築家を中心に選定され、それぞれの仮設住宅地でオリジナルの「みんなの家」が建築された。20戸以下の小規模仮設住宅地を対象としているので、住民の方々から聴取した意見が設計に反映し易く、結果として個性豊かな「みんなの家」が誕生した。九州産業大学矢作研はリズムデザイン(井手健一郎代表)とチームで、「熊本市城南町さんさん2丁目仮設団地」と「阿蘇市内牧仮設団地」を担当したが、ヒアリングから基本設計までは学生が主体で行い、実施設計と現場監理はリズムデザインが主導で行った。住民の方々から

頂いた貴重な意見を、限られた予算の中で如何に形に落とし込んで行きながら、「デザイン」としての独自性を出せるのか、社会に出る前の学生にとって、本当に貴重な体験であった。我々が担当した「みんなの家」では、意外にも集会所という機会はほとんどないので、住民全員が集まれるスペースは必要ないということになった。「さんさん2丁目仮設団地」では、狭い仮設住宅では確保できない子供達の勉強や遊びのスペースが求められ、最終的には雁行したプランを提案し、違った目的を持った人達が一つ屋根の下で、思い思いのことができる空間をデザインした。「阿蘇市内牧仮設団地」は、川沿いの立地で、仮設住宅がなくなった後も恒久的に利用するため、周辺の豊かな景色を見ながら飲食を楽しめる空間をデザインした。

みんなの家という新しいビルディングタイプ

災害救助法により設置される集会所(みんなの家)は、既にデフォルト的なプランは存在するが、場所や規模によって実際の使われ方は様々である。また、前述のようにプッシュ型みんなの家は千差万別である。計画学上、「みんなの家」というビルディングタイプは、研究分野としては未開の地なのかも知れない。KASEIでは現在、それぞれの仮設団地やみんなの家の使われ方調査を行い、記録として残す予定である。その結果が、今後の研究材料となることを期待している。

今後のKASEI活動の在り方について

冒頭で問いを挙げておきながら、残念ながら私自身も明快な解答は持ち合わせていない。KASEI活動に期待することは、参加した学生が、被災地での様々な支援活動の体験を通して、建築でできること(モノ)、活動でできること(コト)、人との関わりでできること(ヒト)、その全てが建築行為だということを学び、建築の職能の幅広さと可能性を理解し、今後の建築活動はもとより、災害時にもそのような力を発揮できる人材となって、そのことを次の世代に伝えられる人になることである。

複数の研究室による 情報共有・情報発信の仕組みづくり

平瀬 有人 Yujin HIRASE

佐賀大学 工学系研究科 都市工学専攻 准教授



KASEI活動日誌



Facebook「KASEI | 九州建築学生仮設住宅
環境改善プロジェクト」ページ
(<http://www.facebook.com/kasei2016>)



KASEIプロジェクトホームページ
(<https://kasei.kumamoto.jp>)



2017年度グッドデザイン賞受賞

2016年4月の熊本地震の発災から2年を迎えた。ちょうど東日本大震災から5年のタイミングで、東日本大震災における建築家による復興支援ネットワーク[ArchiAid]の記録を参照しながら、当時九州の建築意匠/計画系教員・学生でどのような支援ができるかを議論したのを覚えている。そうした先行支援の知見があったからこそ、東日本大震災とは状況の異なる熊本地震での支援活動は大学研究室をそれぞれ仮設住宅団地に担当として貼り付ける形として網羅的に「ものづくり」と「ことづくり」の両面の仮設住宅環境支援を行うことを活動のベースに置くこととなった。

KASEIプロジェクトでは2016年7月の第1回実行委員会を皮切りに、数多くの九州の建築系教員・学生によってさまざまな活動がされてきているが、現在は支援活動を継続しつつも、それらの知見をいかに今後に共有するか、というフェーズに入りつつあるように思う。支援活動の取り組みについては他の方々の論考を参照いただくとして、当初から主に私たちが担当していた情報共有・情報発信をどのように行ってきたかをここではまとめておきたい。

私たちが[ArchiAid]の記録を参照したように、KASEIプロジェクトも今後起こりうる災害においても意味のつくり取り組みとなるよう、情報共有・情報発信の仕組みづくりは当初から強く意識をしていた。各研究室の活動記録を活動後なるべく簡便に共有するために、EXCELファイルではなく多少解像度が粗くとも画像ファイルに書き出して、Facebookの「KASEI | 九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト」ページ(<http://www.facebook.com/kasei2016>)にアップロードし、隔週開催の運営委員会で確認するルールとしたのも、他研究室の活動の参考になるよう情報の迅速性を求めたからであった。さらに隔月開催の実行委員会では全参加メンバーでの活動記録の共有を行っている。当初は情報の迅速性を求めて主にFacebookを用いて情報共有を行っていたが、タイムラインで情報が流れていってしまうことや対外的に情報をまとめて発信するため、ホームページ作成を佐賀大学の中大窪千晶先生にお願いをした。現在1~2ヶ月毎にFacebookでの活動記録を取りまとめて、ホームページ(<https://kasei.kumamoto.jp>)へアップロードすることで、対外的な情報公開を行っている。

また、被災地の状況をリアルタイムで共有できる方法はないかと、併せて携帯端末を用いた緑視率マップ作成ツール

の開発などを行っている中大窪千晶先生に相談したところ、iphoneで現地で撮影した写真をgoogle map上にGPS位置情報とともにアップできるアプリを開発していただけることになった。2016年6月の運営委員会で開発依頼を決定し、7月中旬頃には試作ができてきた。その後試行錯誤して実験を繰り返してはいたものの、現地は一刻を争う迅速性までは必要ではない状況になってきており、多くの支援メンバーの使うFacebookでの情報共有のほうが簡便なため結果的にはこのアプリは使われなくなってしまった。

そうした試行錯誤を経て、Facebook・運営委員会・実行委員会での情報共有によって蓄積されたお互いの活動の知見を共有するサイクルができ、さまざまな支援活動が各地で展開された。そんななかKASEIプロジェクトのグッドデザイン賞応募の呼びかけがあった。主催者の公益財団法人日本デザイン振興会によると、近年は地域貢献への取り組みをテーマに「カタチ」のデザインが明確に存在しないソーシャルデザイン領域にも表彰しているとのこと。幸いなことにKASEIプロジェクトは2017年度グッドデザイン賞受賞となり、地域貢献や災害に対してデザインは何ができるかというテーマを模索していたKASEIプロジェクトメンバーにとって活動の意義を再認識するきっかけとなった。審査委員の評価は以下の通り。

「熊本地震被災地に建てられた、規模や状況が異なる仮設住宅団地を対象に九州にある建築系大学の教員と学生がボランティアで取り組む環境改善、コミュニティ改善活動。「ものづくり」を通じた環境改善、「ことづくり」を通じたコミュニティ改善を、それぞれ意識した活動になっている点や、多様な仮設住宅団地に対応することと、総勢140名が参加するボランティア組織を円滑に運営できるよう団地の担当制を採用した点がユニークだが、今後発生する新たな災害時にノウハウとして活かされることを期待したい。」

本年次報告書でも掲載しているように2017年度は全世界帯アンケート調査を行ったほか、今後は360°カメラによるみんなの家写真調査や居住者へのヒアリング、仮設団地ドローイングによる屋外空間の使われ方調査など、調査のフェーズが増えてくる状況にある。KASEIプロジェクトは3年目の2018年度を目処に収束することにしており、年次報告2016・2017は中間報告的な情報記録の側面が強い報告書となっているが、最終年度には調査分析なども含めた報

告書の作成を検討しているところである。一連の年次報告のデザインはグラフィックデザイナーの中野豪雄さんをお願いしているところであるが、最終報告書においては中野さんの最も得意とされる「情報の構造化と文脈の可視化」を主題に、点在する仮設団地での活動の連関を見出し、可視化するインフォグラフィックスによってKASEIプロジェクト全体の情報発信をしたいと考えている。

KAPとKASEIの被災者支援

西村 親明 Chikaaki NISHIMURA

熊本県土木部建築住宅局管轄課



写真1 仮設住宅の計画をする他県からの応援職員
(熊本県建築課提供)



写真2 仮設住宅の計画を検討する
伊東豊雄KAPコミッショナーと桂英昭KAPアドバイザー
(熊本県建築課提供)

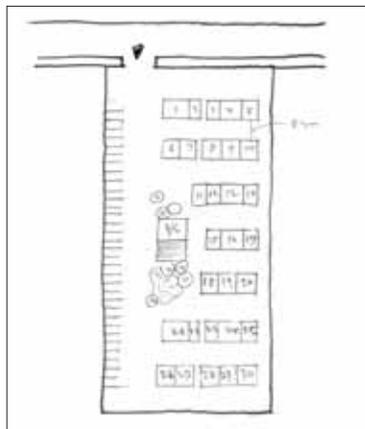


写真3 「熊本型D」の原型となった
伊東豊雄KAPコミッショナーのスケッチ・
西原村小森第一仮設団地
(熊本県建築課提供)

2016年4月14日、16日と2度にわたる震度7の地震は、熊本県の広範囲に甚大な被害を及ぼした。発災直後、アートポリス事務局のある熊本県庁建築課は、被災建築物の応急危険度判定の仕事に追われていた。また、住宅課では地震で家屋を失った被災者のために建設する応急仮設住宅の計画が進められていた(写真1)。

アートポリス(KAP)は、これまで被災地支援の経験があった。2011年の東日本大震災では、KAPコミッショナーで建築家の伊東豊雄氏の発案がもとで、仙台市宮城野区の仮設団地に熊本の木材で「みんなの家」を建設した。この「宮城野区のみんなの家」が、後に熊本でも100棟近く建設されることになる「みんなの家」の原点となった。翌2012年には、豪雨(九州北部豪雨)により阿蘇地方などで土砂災害が発生し、熊本で仮設住宅を建設することになったが、仙台での経験を活かし、仮設住宅をすべて木造とし、みんなの家を2棟建設した。結果的ではあるが、これらの経験が、熊本地震での仮設住宅の取組みを方向付けるものとなった。

また、アートポリスは、様々な建築家とプロジェクトとつづいていくノウハウ(土台)がこれまでの30年間で積み重なっていた。更に、KAP事務局のOB・OG職員が、様々な職場で震災復興の業務にあたり、KAPの名の下、仮設住宅や災害公営住宅の整備を中心に、強い結束へとつながった。

KAPとして復旧・復興を進めるにあたり、伊東コミッショナーやアドバイザー(C&A)と様々な協議を重ねながら、仮設住宅の配置やみんなの家の計画を進めていった。

海外出張中だった伊東コミッショナーは、発災後直ぐに熊本に駆けつけられ、蒲島知事との会談で伊東コミッショナーに助言を受けながら仮設団地を計画していくことが決まり、早速、最初に着工する西原村小森第一仮設団地と甲佐町白旗仮設団地の計画に助言を受けることとなった。

伊東コミッショナーは同席した桂アドバイザーとともに、県庁の会議室で被災者が少しでも安らぎを感じてもらえるような住棟の配置など、スケッチを重ねて計画していった(写真2,3)。隣棟間隔を約6mとしたり、3戸1棟に住棟を分節し南北に小路を配置したりする「熊本型D^{*}」がここで完成した。

このフォーマットは、住宅課に勤務する県職員や他県などから応援に駆け付けた職員で共有され、施工団体との具

体的な計画に反映された。昼夜問わず桂アドバイザーとの協議を重ね、担当者らは一つ一つの団地を計画していった。敷地を調査して配置計画の素案を提示する施工団体の担当者も、従来の仮設団地の配置計画との違いに戸惑いもあったが、計画を進めていくにつれ、県の考えを理解していただき、施工者が現地調査し初めて提示する各団地の初期の計画案も、県の考えに近い計画案が提出されるようになり、整備が加速していき110団地が完成した。

住宅の計画にあわせ、集会施設である「みんなの家」の計画も進められた。集会施設を木造とすること、団地の戸数に応じて建物の規模や棟数を変えること、具体のプランや概算工事費などを国と協議して了解を得た。いち早く仮の住まいを提供するため、早急に仮設住宅をつくることを最優先としながら、仮設に入居された方の憩いの場となる「みんなの家」も住宅と同時期につくれるよう、C&Aが設計した「規格型のみんなの家(40m²、60m²の2タイプ)」を配置することを基本とし、80戸以上の大規模な団地ではKAPのノウハウを活かして、伊東コミッショナーが推薦した建築家が設計する「本格型のみんなの家」も8団地に計画した。8つのKAPプロジェクトが一気に立ち上がり、ほんの数か月で計画・設計・工事を進めていくことになった。なお、ここまでの計画が発災後2~3週間というハイスピードで進んでいったこととなる。

KAPとして復旧・復興を進めたことで更に取組みが広がっていった。伊東コミッショナーの呼びかけにより、東北で「みんなの家」の建設に取り組んでいる「Home-for-All」、東京や愛媛県今治市の大三島で活動されている「伊東建築塾」、また、家具メーカーなどの協力により「みんなの家」で使用する多くの椅子を手配していただいた。

桂アドバイザーは、仙台市で建設した「みんなの家」でも木材を提供していただいた湯前町や水上村と調整をしていただき、木製のベンチやテーブル、益城町テクノ仮設団地の「みんなの東屋」の支援につながっていった。

曾我部アドバイザーは、いち早く神奈川大学の研究室と連携し、木製の椅子の製作・提供していただいた。また、グラフィックデザイナーの野老朝雄氏を紹介していただき、神奈川大学や九州大学、熊本大学の学生の協力により、全団地の案内板をデザインすることができた。

末廣アドバイザーは、九州大学の菊地成朋教授らとともに

に、九州・山口を中心とした建築系の大学等が熊本地震の復興を支援する仕組みを構築され、多くの先生や学生らで「KASEIプロジェクト」が組織された。更に、日本財団「わがまち基金」の助成を受け、日本財団と協働して支援することとなり、団地内の花壇の整備や家具の制作、その「ものづくり」の中で被災者と学生との交流などといった「ことづくり」も一気に加速し、KASEIプロジェクトの活動が広く展開していった。

このように、KAPを熊本の地で長く続けてきたことが、今回のKAPによる復興支援につながったものと思っている。

被災から2年。復旧から復興に移るなか、KAPも仮設住宅における「みんなの家」の支援から、被災した公民館を再建するという地域の復興支援や災害公営住宅の整備へとかわり、現在、被災した南阿蘇鉄道の終着駅・高森駅のランドデザインという新しいプロジェクトへと変化しつつある。

KASEIプロジェクトの初期のメンバーの多くは、卒業し社会に出ている。私自身もKAPを4年担当し、春から他の部署で仕事をしている。四分の一近くの仮設住宅も空き家になり、仮設団地の廃止も始まった。しかし、被災者が住まいを再建したり、仮設住宅から災害公営住宅へ移り住んだりしていくのが始まったばかりだ。

KAPもKASEIも引き続き被災者に寄り添いながら、復興支援を進めていくことになるが、これまで携わってきた我々も様々な立場で関わっていきたいと思っている。

最後に、KAPやKASEIプロジェクトの取組みに携わった学生や先生の皆様、施工に携わった皆様などに感謝するとともに、何より、被災者が一日でも早く心の安らぎを回復し、新しい熊本へと発展していくことを願っている。

*1 桂英昭:「熊本型デフォルト - 応急仮設住宅計画」WEB版建築討論、建築時評、009号、2016年秋(7月-9月)、http://touron.aij.or.jp/2016/08/2438

年間スケジュール

Annual Schedule

年	月	日	KASEI運営活動名	場所	主旨内容
2017	4	4	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第5回KASEI実行委員会の企画 ブッシュ型みんなの家の進行状況について 今年度の活動について
		15	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第5回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について
		23	第5回KASEI実行委員会	熊本県	アートボリス講演会 KASEIの各自治体の活動報告 今後の活動について
	5	9	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第5回KASEI実行委員会からの反省 年度末報告書について
		27	運営委員会	熊本県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第6回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について
	6	13	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第6回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について 運営資金の使途について
		2	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第6回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について 今後の活動について、活動拠点について、全戸調査について、みんなの家の使われ方について、東北視察について
	7	15	第6回KASEI実行委員会	熊本県	東北大学 小野田先生講演会 活動レポート発表
		27	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第6回KASEI実行委員会からの反省 年度末報告書について
	8	17	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 年度末報告書について
9		7	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 年度末報告書について
9	28	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 九州北部豪雨支援について 第7回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について	
	10	17	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 九州北部豪雨支援について 第7回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について
10	30	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 九州北部豪雨支援について 第7回KASEI実行委員会の企画 年度末報告書について	
	11	22	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 九州北部豪雨支援について 第7回KASEI実行委員会の企画
11	26	第7回KASEI実行委員会	熊本県	全戸調査アンケートの報告会	
	12	12	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 九州北部豪雨支援について 第7回KASEI実行委員会からの反省 全戸調査アンケートについて
2018	1	9	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第8回KASEI実行委員会の企画 全戸調査アンケートについて
		2	6	運営委員会	福岡県
	3	3	第8回KASEI実行委員会	鹿児島県	運営審議 一年間の活動報告 研究発表 新年度、新体制に向けた話し合い
3	16	運営委員会	福岡県	活動報告、活動予定、運営方針の確認 第8回KASEI実行委員会からの反省 全戸調査アンケートについて 360°カメラによるみんなの家撮影の企画	

メディアスクラップ

Media Scrap

掲載日
掲載紙
掲載面
特集ページ
記事タイトル

- 2017.05.26**
読売新聞
益城町テクノ団地に「みんなの砂場」が完成
- 2017.07.11**
RKK(熊本放送)
大津町室第二仮設ブッシュ型みんなの家意見交換会
- 2017.07.26**
KKT(熊本県民テレビ)
宇土市新松原仮設ブッシュ型みんなの家意見交換会
- 2017.09.13**
建設通信新聞
建築展2017東京シンポジウム
一緒に考え、一緒につくる「みんなの家」その先へ
<https://www.kensetsunews.com/web-kan/104447>

- 2017.09.27**
朝日新聞
益城の仮設に防風壁
山口大の学生らボランティア
<https://www.asahi.com/articles/ASK9V54W2K9VTLVB00Q.html>
- 2018.02.09**
読売新聞
鹿児島大学が宇城市の仮設団地に「みんなの家」を設計



寄付賛同願

Requests for Donations / Support

九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト

(KASEI: Kyushu Architecture student Supporters for Environmental Improvement project)

賛助会員会費のお願いについて

御中

KASEI 実行委員長 末廣 香織

学生代表 遠藤 由貴



平成28年4月に発生した熊本地震により、熊本県内各地は大きな被害を受けました。

九州内の建築系大学は、5月に「KASEIプロジェクト」を立ち上げ、現在、応急仮設住宅に入居されている方々を支援しています。今後約1年間、熊本県土木部建築課および各市町村と協働し、学生ボランティアを中心として応急仮設住宅の環境向上（仮設住宅内外の設えと質的向上や集会所の運営など）に取り組んでいきます。賛助会員の皆様には、年会費の形で活動にご協力いただくとともに、可能であれば現地での活動にもご参加いただきたく存じます。

本主旨にご理解いただきますとともに、ご協力を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

2017年9月

- 会員：団体賛助会員（活動への参加・支援） 年会費5万円/口 以上
- 個人賛助会員（活動への参加・支援） 年会費1万円/口 以上

ご協力頂きました賛助会員（団体・個人）のみなさまのお名前は最終報告書に記載させていただきます。掲載に不都合がある場合には事務局までご連絡下さい。

- 振込先：ゆうちょ銀行 KASEI 記号：17440 番号：81365781
- 他金融機関からの振込の受取口座として利用する場合は
- 店名：七四八（読み：ナナヨンハチ） 店番：748 普通預金 口座番号：8136578

- 連絡先：九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト 事務局
- 〒815-8540 福岡市南区塩原4-9-1 九州大学 芸術工学研究院 田上研究室
- TEL：092-553-4438 FAX：092-553-4438
- e-mail：kasei2016@gmail.com
- Facebook：https://www.facebook.com/kasei2016/
- HP：http://kasei.kumamoto.jp

活動助成・賛助会員

Supporters List

Supported by  THE NIPPON FOUNDATION

賛助会員

- ・アーキタンツ一級建築士事務所
- （株）あい設計
- （株）アイ・トレーディング
- ・旭化成ホームズ（株）
- （株）粹設計
- ・伊藤建築都市設計室一級建築士事務所
- （株）一原産業
- ・インターメディア一級建築士事務所
- ・エイテツアーキテクト一級建築士事務所
- ・大石和彦建築アトリエ
- ・小竹組
- ・JR九州株式会社
- （株）志賀設計
- ・株式会社静建築まちづくり研究所
- （株）染野製作所
- （株）竹中工務店
- （有）田中俊彰設計室
- ・株式会社日建設
- ・株式会社日本設計
- （株）松山建築設計室
- （株）ミスターフローリング
- （株）ファクダスアーキテクツ
- ・古森弘一建築設計事務所
- ・北海道パーケット工業（株）
- （株）無重力計画
- （株）室園建設
- （株）メイ建築研究所
- ・柳瀬真澄建築設計工房
- （株）山下設計
- ・リズムデザイン一級建築士事務所
- （有）設計室

(50音順)

メンバー一覧

Member list

実行委員

朝廣和夫 | 九州大学

赤川貴雄 | 北九州市立大学

秋元一秀 | 崇城大学

有馬隆文 | 佐賀大学

安齋哲 | 九州産業大学

岩元真明 | 九州大学

岩佐明彦 | 法政大学

井上朝雄 | 九州大学

鶴飼哲矢 | 九州大学

牛島朗 | 山口大学

内田貴久 | 長崎大学

内田文雄 | 山口大学

大月敬雄 | 東京大学

岡田知子 | 西日本工業大学

桂英昭 | 熊本大学

加藤浩司 | 有明工業高等専門学校

菊地成朋 | 九州大学

城戸崎和佐 | 京都造形芸術大学

黒瀬武史 | 九州大学

後藤隆太郎 | 佐賀大学

西郷正浩 | 崇城大学

佐久間治 | 九州工業大学

佐藤哲 | 熊本県立大学

志賀勉 | 九州大学

四ヶ所高志 | 福岡大学

柴田晃宏 | 鹿児島大学

下田貞幸 | 熊本高等専門学校

末廣香織 | 九州大学

曾我部昌史 | 神奈川大学

高橋浩伸 | 熊本県立大学

鷹野敦 | 鹿児島大学

田北雅裕 | 九州大学

田中尚人 | 熊本大学

田中智之 | 熊本大学

谷正和 | 九州大学

田上健一 | 九州大学

槻橋修 | 神戸大学

辻原万規彦 | 熊本県立大学

寺川政司 | 近畿大学

デワンカーバート | 北九州市立大学

徳田光弘 | 九州工業大学

富安亮輔 | 東洋大学

中大窪千晶 | 佐賀大学

中園哲也 | 崇城大学

根本修平 | 福山市立大学

朴 光賢 | 鹿児島大学

姫野由香 | 大分大学

平瀬有人 | 佐賀大学

藤原ひとみ | 有明工業高等専門学校

藤田直子 | 九州大学

星野裕司 | 熊本大学

前田茂樹 | 大阪工業大学

正木哲 | 有明工業高等専門学校

益田信也 | 近畿大学

増留麻紀子 | 鹿児島大学

三笠友洋 | 西日本工業大学

宮崎慎也 | 福岡大学

宮本佳明 | 大阪市立大学

安武敦子 | 長崎大学

矢作昌生 | 九州産業大学

横山俊祐 | 大阪市立大学

(50音順)

学生実行委員

有明工業高等専門学校 藤原研究室 ――――大政風 | 柴田逸希 | 中川智哉 | 吉村春香 | 渡邉大貴 | 池上大智 | 宮田紳太郎

大阪市立大学 宮本研究室 ――――川口昂史 | 重光理沙 | 中嶋純一 | 蒔口祐美子 | 中林顕斗 | 宮城太一

大阪市立大学 横山研究室 ――――土居和樹 | 富永慧 | 海本芳希 | 中野隆太

大阪工業大学 前田研究室 ――――東野健太 | 阿部彩音 | 鳥野美樹 | 埜田太一 | 萩原克典 | 林雅大 | 新井悠太 | 隈元峻太 |

宇田政仁 | 南石敦史 | 帆足勇輝 | 片岡一智 | 岩村莉奈 | 藪南美 | 渡邊葵衣

鹿児島大学 柴田研究室 ――――明治強照 | 坂井一隆 | 上村佳子 | 坂元利伎 | 高尾奈緒 | 中尾有希 | 是松志門 | 佐藤由奈 |

後藤隆誠 | 森悠真 | 宮原佳美

鹿児島大学 鷹野研究室 ――――林田真知 | 畠俊典 | 平川美憂 | 加藤佳輝 | 田村健太郎 | 赤松麻由 | 吉原佳代 | 稲留壮親 |

大脇友里加 | 柴田隆詠 | 田畑貴士 | 徳田優志 | 安長瑠人

九州大学 末廣研究室 ――――遠藤由貴 | 谷口和弘 | 鶴田敬祐 | Ester Peralta | 河村悠希 | 大谷芽生 | 吉岡大貴(趙研究室)

九州大学 菊池研究室 ――――野口雄太 | 前川遥奈 | 丸山千尋 | 藪井翔太郎 | 片岡美佳 | 沼口悠太 | 春山詩菜(黒瀬研究室)

九州大学 田上研究室 ――――野添脩斗 | 田中精耕 | 河合惠美 | 磯上千尋 | 福田健 | 有馬駿 | 中原有理 | 山中雄登 |

遠藤智樹 | 宮寄慧 | 木山響心 | 高尾昂大 | 伊藤高基 | 河原ゆい | 前田智洋

九州工業大学 佐久間研究室 ――――今井智也 | 徳永晋 | 野口亮太 | 松山裕生 | 池尻賢矢 | 石川龍 | 井藁大希 | 西田淳

九州工業大学 徳田研究室 ――――大久美保 | 木嶋耕平 | 西田晴貴

九州産業大学 矢作研究室 ――――小澤成美 | 松石和也 | 近藤るい | 田所佑哉 | 森田滉己 | 山本彩菜 | 井本大智 | 濱津のぞみ |

松田湖都美 | 吉永広野

近畿大学 益田研究室 ――――守田駿 | 藤原丈武 | 野坂響 | 大棚紀輝 | 真弓静七 | 樋口葵 | 福田菜々子

熊本大学 田中研究室 ――――藤田智之 | 古賀壮一郎 | 中村太紀 | 吉永優成 | 甲斐悠加 | 吉海雄大 | ワナズルフィア |

牛島美夏 | 立花和弥 | 武井碩毅

熊本県立大学上拂研究室 ――――森内貴士

熊本県立大学 佐藤研究室 ――――小濱光時 | 宇治野里帆子 | 加悦由樹 | 金城正汰 | 津田桂佑 | 鳥越柚子 | 中野未香子 |

山田大貴

熊本県立大学 澤田研究室 ――――境大介 | 橋本康隆 | 濱田兼士朗 | 竹本雛子

熊本県立大学 鄭研究室 ――――高島遥 | 平山響子

熊本県立大学 環境共生学部居住環境学科 ――――加藤里恵 | 金氏竜哉 | 川嶋梨月 | 児玉誠二郎 | 田上雄基 | 西口昂輝 | 野田歩実 | 福住陽大 |

藤本功大 | 松岡紗生 | 飯星裕貴 | 緒方優風 | 加藤瑠華 | 高沢香苗 | 田北美早紀 | 新山舞 |

野崎由佳 | 野田理子 | 長谷川侑希 | 松永亜由美 | 松藤優紀 | 山口弥桜 | 山崎朱音

熊本県立大学総合管理学部 総合管理学科 ――――阿部いずみ | 蛭子裕士

熊本高専 下田研究室 ――――許斐ももこ | 西田みずき | 藤井祐稀 | 永野運大(浦野研究室) | 藤掛佑基(松家研究室) |

井島拓也(入江研究室) | 松田崇志(上久保研究室) | 吉村龍(岩坪研究室) |

小嶋晃平(勝野研究室)

佐賀大学 平瀬研究室 ――――副田和哉 | 山田章人 | 石井陽菜 | 坂本明文 | 広谷洸多 | 大久保健太 | 池尻真人 | 江崎史浩 |

岳嘉鵬 | 中村実咲 | 永山貴規 | 林田大晟 | NUTHAWAT RATTANASUPORNCHAI |

JONGSUEBSOOK JAKKRAVUTH

崇城大学 秋元研究室 ――――安達大樹 | 一鬼正浩 | 笠井雄登 | 下川祥平 | 鶴えりな | 池田清華 | 中村公俊 | 中山毅男

崇城大学 西郷研究室 ――――谷本優希 | 中津美穂 | 古田佑季 | 野嶋柊子 | 二階堂匡佑 | 福田智大 | 森下鉄平 | 坂井郁途

第一工業大学 ――――河野宏文 | 麻生大雅 | 金枝秀憲

長崎大学 安武研究室 ――――望月咲 | 石本隆之介 | 黒板未来 | 佐々木宏太 | 鶴地宏海 | 丸山一寿 | 一瀬泰斗 | 宇都宮想 |

加來夏美 | 髙村耀彦 | 長岡康平 | 白水涼子 | 深澤恵

福岡大学 四ヶ所研究室 ――――西野雄太 | 原昌平 | 井上和音 | 鈴木嗣巳 | 出口貴太 | 永松怜子 | 中元翔一 | 姫野勇輝 |

屋宜望 | 岩井巧

福山市立大学 ――――内海果奈 | 新家健太 | 舟木花織 | 笠松千春 | 坂篤紀

山口大学 ――――今富良介 | 高橋弦士朗 | 中尾汐里 | 瀬戸口佳奈美 | 菅元翔 | 吉永裕樹 | 小崎由香 | 赤松恵 |

小坂田祥太 | 黒田百夏 | 花野修平 | 三崎令羅 | 石口真菜 | 安部彩華 | 新垣大貴 | 塩谷玲奈 |

中村勇志 | 呉英里子 | 北村祐樹 | 中谷壮悟 | 濱友彦 | 蒲池航洋

(50音順)

編集後記

Postscript

遠藤 由貴 Yuki ENDO

2017年度 学生代表
九州大学大学院 人間環境学府 空間システム専攻 修士課程 修了
清水建設株式会社 設計部

2017年度、KASEI2年目の学生代表を務めさせていただきました。初年度から引き続き熊本の仮設団地への支援活動を行っている間に、次の災害が九州を襲いました。2017年7月に発生した九州北部豪雨です。KASEIの活動をいかに次へ生かしていくべきか考えている矢先に起こった大きな災害でした。

九州北部豪雨に際し、福岡県朝倉市、東峰村に4つの仮設団地が建設され、KASEIが支援に入ることが決定し、私もメンバーとして活動を行いました。そこで強く実感したのは経験を活かすことの重要性です。仮設団地での生活がどのようなものになるのか、集会所が団地の中でもつ役割、ボランティアの調整の難しさなどを熊本地震での経験を元に事前に知っていたことにより、北部豪雨での支援の段取りや内容の決定等がスムーズに進みました。また、仮設団地の住民の方に熊本での事例についても紹介することができました。これは、奇しくも在学中に大きな災害を身近に2つ経験することとなったために実現したことであると思います。しかし、さらなる災害が日本で起こった場合、私たちがそうであったように、支援に入るほとんどの人間が災害の初心者で、手探りで支援活動を始めることになります。そういった時に、この記録誌が支援活動のヒントを少しでも残せるようなものになれば幸いです。

熊本地震から2年、九州北部豪雨から1年が経ち、被災地の様子がメディアで取り上げられる機会もめっきり減ってしまいましたが、現地の復興はまだまだこれからです。その一方で、先日発生した大阪での地震のように、日本では自然災害が起り続けています。日本は災害大国です。これからは災害と共存していかなければなりません。現在私は被災地から離れた場所に拠点を移していますが、私たちのように災害支援を経験した人間がいざという時に対応できるような心構えを日頃からしていくことが、次なる災害での辛さを最小化するのに重要であると思います。

最後になりましたが、KASEIの活動は多くの方々にご賛同ご支援をいただきました。心から感謝申し上げます。また本プロジェクトにご協力頂いた関係者の皆様、各仮設住宅団地の住民の皆様には様々な場面でご指導・ご助言を多くいただき、支援する側の私達が逆に多くのことを学ばせていただきました。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

KASEIプロジェクト 年次報告2017

KASEI Annual Report 2017

発行：
KASEIプロジェクト実行委員会編集：
佐賀大学平瀬研究室デザイン：
中野豪雄、鈴木直子(中野デザイン事務所)

2018年9月2日発行



Kyushu
Architecture Student
Supporters for
Environmental
Improvement Project

KASEI



KASEI
